
純粹少女と不良少年

白華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純粹少女と不良少年

【Nコード】

N6236L

【作者名】

白華

【あらすじ】

嵐 那子は読書が好きな文学少女で、純粹である。

永野 聖は不良と噂される少年である。

この2人が紡ぐ物語とは…？

出会は瞬間に…

一時限目の終わりを告げるチャイムが、鳴り終わった。

「お、わったあ〜。」

「何、言ってるの。まだ一時限目でしょ。」

私は昨日、徹夜で小説を読んだが為に、目の下に隈くまがくつきりとあった。

貴重な睡眠時間を、貴重な読書時間と引き換えにした証拠だ。

申し遅れましたが、私、嵐あいらし 那子なこといます。

只の読書好きの女子高生です。

ちよっと、人の顔を覚えるのが苦手です。

そして、私と他愛のない話をしてるのは、友人兼読書仲間の齋条さいじょう 加奈かなちゃんです。

超が付く程の美少女で、情報通。

私が周りの話についていけるのは、加奈ちゃんの情報のおかげです。

私たちは読書クラブに所属しています。

部員は私たちだけなんです…。

「それよりさ、今日アイツ来てるの、知ってる？」

「ふえ？ アイツって？」

「…アンタそういう話は疎うといんだっけ？」

私は何の話かわからず、頭にクエスチョンマークが浮かんでいる。

「？永野^{ながの} 聖^{ひつじ}？って、知ってるよね？」

「永野君って、同じクラスでしょ？ あとは、休みがちってことくらいしか…。」

「じゃあ、不良ってことは？」

「え、そうなの？」

加奈ちゃんは、やっぱり。と、言わんばかりに溜息をつく。

「高校入学して、2ヶ月は経ってるでしょう？」

「うん」

私は適当に相槌を打った。

「入学式の日、上級生を殴ったらしくて、その日からずっと停学だったのよ。」

「そんなに荒れてるの？」

「荒れてるって言うか、喧嘩を買ってるって言うか…。」

「へえ…。」

のほほん、とした返事に呆れたのか、加奈ちゃんはまた深い溜息をついた。

「停学のこと学校が、曖昧にして対処したんだって。」

「何で？」

「知られたくなかったんでしょ、学校側が。」

「そっかあ…。」

またも頼りない返事をした私に、念を押すように加奈ちゃんは言っ

た。
余程、心配らしい。

「…万が一でも、あいつには近寄らない方がいい！ 分かった!？」
「わかったから、そんなに力まなくても大丈夫だよ!？」

加奈ちゃんの押しに、私は少し拍子抜けしてしまった。

「あつ！ 次、科学じゃない!」

加奈ちゃんは時計を見ると、急いだように言った。

なぜなら、生徒が普段授業をする教室は西棟。

特別活動教室など、体育館や科学室は東棟にある。

移動する時間は、急いでも2〜3分ほどかかってしまう。

そんな中でも、私はキリのいいところで読書を終わらせたい。
だけど、加奈ちゃんはそれを許してはくれませんでした。

「那子！ 次、移動教室だってば!」

「うゝ、あと5分。」

「5分もないから！ 科学室、行かないと!」

「えゝゝ。」

「早く!」

私は加奈ちゃんに引つ張られ、廊下に出た。
なるべく早歩きで、科学室へ向かう。

「そんなに、あの小説面白かったの?」

「面白いよ! 今度貸す?」

「私も読みかけがあるから、それ読んだらね。」

「うん！」

「それから那子、あんまりフラフラ歩かないで。」

私が気付かなかっただけで、かなり危なっかしく歩いていたらしい。あと何センチかで相手とぶつかる場所だった。って、加奈ちゃん
は言っていた。

「あと、永野聖、結構授業サボってるから、どっかで会ったら気を
つけてね」

「心配性だね、加奈ちゃんは…。」

「だって、こんなにフラフラ歩いてるんだから、心配するに決まっ
てるでしょ…！」

「はいはい、分かったよ…。」

ドンッ

私は誰かにぶつかってしまった。
言われた傍そばから…。

「わ、すみません…。」

私は上を見上げた。

うわぁ、キレイな顔してる…。

多分男子なんだろうけど、すごくキレイだった。
それから、かなり背が高い。
あと、すごく睨まれた。

「お前、どこ見て歩いてんだよ」

「す、すみませんでしたあ!!」

「あ、那子!」

私は脱兎の如く逃げた。

だって、怖かったし、怖かったし、怖かったし…。

兎に角、逃げた。

多分、科学室なんて通り過ぎてしまった。

私、今どこ走ってるんだろ？

出会は瞬間に…（後書き）

恋愛系は初挑戦だったので、自分でもよくわかりません。
感想を頂ければ嬉しいです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

事件発生 屋上にて…

那子^{なこ}が走り去った後には、那子がぶつかった男子と加奈^{かな}が残っていた。

その間には微^{かす}かに、火花が散っているかのようにも思える。

または、加奈が一方的に睨^{にら}んでいると言おうか…。

「何…？」

「覚えておきなさい、？ 永野^{ながのひじり}聖？。あの子に何かしたら、只じゃ済まないわよ。」

加奈は男子に睨^{にら}みと凄^{しみ}みを利かせ、科学室へと歩いていった。

「……俺、何かしたか？」

「うあーっ！ 怖^{こわ}かったよお〜！」

私は勢い余って、屋上まで来てしまいました。

「って、いつか授業始まつてるよ！ …まあ、いいや。 寝不足だしね。」

我ながら呑気な考えだ。と思いつつ、深い眠りにつくことにした。保健室とか木陰の下とかだったら、更に良かったかもしれない。だけど、誰かに見られて？サボり？だなんて思われたくないし…、サボりだけど。

ガチャッ

誰か来た！？

私以外にも授業をサボってくる人なんているのかな？
確か加奈ちゃんが何か…。

永野聖って、結構授業サボってるらしいから、どこかで会ったら気をつけてね…。

…永野君だあああああああつっ！！！！

「何してんの？」

「えっ！？ あ、はい！」

突然、誰かに話しかけられ、私は思わず、顔を背けた。
いきなり話しかけられたからかもしれないけど、何て話しかけられたか、忘れてしまった。

「…えーと、何と仰いました？」

「何してんの、って聞いたんだけど？」

「授業に遅れたので、昼寝でも、…と。」
「大分、眠そうだったしな。」

私は勢い良く顔を上げた。

「え、何で知って、…って、えっ!？」

…あっ! さっき、ぶつかっちゃった人だ!

この人が永野聖!?

あんまり、顔を見たことがないから、覚えてなかった…。

永野君、休んでたし…。

「…嵐 那子、だっけ?」

「はい、そうですけど…!」

私はなんとなく目を逸らした。

見つめる理由もないし、睨まれるとなんとなく逸らしてしまう。

「齋条つてさ、お前に執着くやびじゆししてんの?」

「えーと、心配性なだけなんじゃないかな…?」

「お前に何かしたら、只じゃ済まないらしいんだけど、どういっつと?」

「さあ…?」

蛇に睨まれた蛙の気持ちがあったような気がした。
それから、話の趣旨しゆしが理解できません。

「突然ですが、あなたのお名前は…?」

「…永野聖」

ですよーっ！！

「で、斎条ってお前のダチなのか？」

「そうですけど…、それが何か？」

「…丁度、お前がいるんだ。代わりに詫びるよ。」
「え？」

意味が分からない…。

「俺、特に何かした訳じゃないんだけど、斎条に色々言われて、むかついてんだ。」

「私に何か関係が…？」

「関係大有り。だから詫びろって言うてんの。」

「ふえっ…？」

永野聖の手が私に伸びてくる。

なっ、ななっ、な、何を！？

手が私の顎に添えられる。

ーうあゝっ、何、何、何、何されるの！？

そして、ぐっと身を寄せたてきた…。

事件発生 屋上にて…（後書き）

更に短くなりました。

タイトルは適当です！

あまり深く考えてません！

スキ、キス、スキ。

唇が触れる。

「ッ……！」

顔が熱い。

思わず手で顔を覆おおってしまう。

「顔、赤い……。」

「いま、な、なにをつ……！」

「俺への詫びだろ。」

「なん、で………？」

分からない。

あんな理由でキスなんてできるの？

目的は一体、何！？

「好きだから」

「……え」

「キレイな奴にキスはしない・」

「そ、れ………って？」

更に顔が赤くなる。

頭が上手く回らない。

頭が真っ白になる。

「でも……」

「不満？」

イヤじゃない。

キラじゃない。

腕で顔を隠しているけど、永野君も顔が赤くなっている。
照れ隠しなの、かな？

「これ、俺の一世一代の告白なんだけど」

「……でも、なんで、私？」

「憶えてないのか？ 図書室で会った時のこと」

「図書室？」

私は全然、憶えていなかった。
人の顔を覚えるのも苦手だから、尚更……。

「図書室でお前に本、薦められた上、夕方まで読まされた。」

「……本？」

あ、薄っすらと……。

確か、入学して少し日が過ぎた頃だ。

「俺、お前の影響で読書するようになったんだ。」

「そうなの？」

「しかも、殆どお前が読んでた本。」

私が読んだ本……って、ファンタジー系とか学園モノとか恋愛系が多いけど……。

結構、乙女路線じゃなかったっけ？

「流石さすがに、恋愛系とかは無理だけど…。SF系の本とかは、お前が先に借りた本ばかり。」
「…本当に？」
「本当だよ。」

不良と言われている人が、私と同じ本を読んでいたなんて、ちょっと衝撃だ。

「…でも、永野君って、不良なんでしょ？」
「…不良？」

永野君は？不良？と言われるのが心外だ。とでも言うかのように、怪訝けげんそうな顔をした。

「だって加奈ちゃんが…。」

「喧嘩売られてるだけだ。怪我するのも嫌だし、相手に鳩尾みそおちとか食らわせるだけ。」

「不良じゃないんだ…？」

「俺、目付き悪いから、不良だ。…って思われるんだろうな。」

じゃあ、皆の勘違い…？

まあ、私もちよつとはそう、思ってたんだけど。

「5月に学校来て無かったってというのは…？」
「事故に遭った。一ヶ月も入院してたんだ。」

そう言つて、永野君は自嘲気味に笑った。

何か、大分誤解のある人だな。

？ずっと停学？って言われてたけど…。

「話逸れたけど、返事は？」

「…えっ！？ あ、私、あの…。」

突然、そう言われて、焦^{あせ}って、どもってしまった。

永野君がそう思ってくれていたとは、露^{あせ}ほども知らなかったし。

「今じゃなくても、いいから…。」

永野君はそう言ってくれたけど、私は永野君が求めているような答えは、今は出せない。

だけど、伝えたいことは言っておこうと思った。

だって、こんなに素敵^{あせ}な人なんだもの！

ええ、つまり、惚^{あせ}れてしまいました。

この人に、きつと、そうです。

「私、まだ永野君のこと、全然わからない。」

永野君は黙って、私の話を聞いてくれている。

「だけど、永野君のこと、もっと知りたい。…って、思ったの。」

「うん」

「だから、永野君には、まだ応えられない」

私がそう言つと、永野君は頷いた。

「だろうな。話したのなんて、まだ2回だし。」

「ごめんなさい…。」
「お前が謝る事ないだろ。」

永野君は私に優しく言ってくれた。
優しすぎるぐらい…。

「私ね、永野君のこと、もっと知りたいの。だから、友達からじや、ダメかな？」

「…友達から？」
「うん」

永野君は一瞬、考え込むように目を伏せた。

「わかった。友達から、な。」

その言葉を聞いてから、私の目が少し光った。

「それから、永野君、読書好きだよね？」

「まあ…。」
「だったら、読書クラブに入らない？」

拍子ひょうし抜けしたのか、永野君は目を見開いた。
きよとん…、としてて、ちょっと可愛い…。

「そんなの、あるのか？」

「あるよ！ 私と加奈ちゃんしかいないんだけどね。放課後、
書室に集まって好きな本のことが、語ったりするの」
放課後、
図

「…楽しい？」

「私は楽しいよ！ 永野君も入ろうよ！」

「じゃあ、入る…。」

「本当に！？ やったあ！」

永野君が答えるより早く、私が突然、声を出したので、永野君は驚いていた。

内心、私は心が弾はずんでいた。

「加奈ちゃんと2人だったから、もう一人ぐらい増えないかなって思ってたの！」

「俺がいても、大丈夫なのか？」

「大歓迎だよ！ 読書仲間が増えるの、とっても嬉しいから！」

「そうか…。」

そんな、ほのぼのとした空気も束つかの間だった。

バンッ

新たな人物が現れてからは、殺さつばつ伐とした雰囲気きが漂っている。

「那子！？」

「加奈ちゃん！？」

私の名前を呼んだのは、加奈ちゃんだった。

私は条件反射で叫んでしまった…。

「なっ…！？ あんた、ちょっと！ 永野聖！ 何であんたが那子といるのよ！？」

「何でって、好きだから。」

この永野君の発言から、更に誤解と怒りを生むことになってしまいました。

スキ、キス、スキ。(後書き)

1話1話の内容が長いとのことなので、短くしてみました。

区切るところ、間違っていないか心配です…。

これ、短編小説用に書いたモノなので、結構長かったんだなあ。と、自分でもやっと自覚したところです。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

純粹な君

それは、6時限目が終わった昼下がりに。

しとしとと降ってきた雨は、どしゃ降りになっていた。

そして俺、永野聖ながのひじりは、困った事に傘を所持していなかった。

うわ、雨降ってきた。

学校から出て数分でどしゃ降りになった為、近くにあった大木の下で雨宿りをする破目になった。

「…にしても、デカイよなあ。」

一人、そんなことを呟いた。

「那子に借りた本でも読むか…」

だけど、このまま雨が降り続けたらどうしようか…。

雨足が弱まったら、走って帰ろう。

しかし、家から学校まで20分、というのが、今の自分には痛手だ…。

今度から、自転車で通った方が良さそうだ。

俺の移動手段は大体、徒歩か電車である。
電車だと、色々と便利だし。

鞆から本を取り出し、タイトルを読み上げる。

「...? CLEAR?？」

書き出しは...、

Her heart is clear like a clear sky .

(彼女の心は、晴れた空のように澄んでいます。)

Her voice is clear as a bell sound .

(彼女の声は、鈴の音のように澄んでいます。)

Her eyes are clear blue .

(彼女の瞳は、青く澄んでいます。)

Her tears are clear .

(彼女の涙は、透明です。)

It is clear like water .

(水のように透明です。)

The tears, like rain, transferred to the cheek.

(その涙は、雨のように頬に流れます。)

Rain is so clear in her mind.

(雨は彼女の心のように澄んでいます。)

「これ、英語の詩集だったのか。次からタイトルが変わってる…。」

「あつ、聖君だ〜!」

「ああ、那子か。」

那子の声で我に返った。

何度か、読み返していたらしい。

いつの間にか、雨が小雨になってきていた。

「私が貸した本、読んでくれてたんだあ。」

「那子、これって詩集なのか?」

「? そうだよ。読みやすいから、好きなの!」

「へえ…。」

那子は英語の詩が好きなのか、単に詩が好きなのか考えながら、俺は本を鞆にしまった。

「もしかして、今、雨宿りしてた?」

「…まあ、そんなとこ。」

「さっきまでひどかったよね。」

俺は鞆から目を上げて、ふと、那子を見た。

「傘無いんなら、一緒に帰ろうよ！一本しかないけど…」

「…いいのか？」

「うん！ね、一緒に帰ろう！」

「ああ…」

本当、純真無垢というか、心が澄んできるといっか…。

何ていうか、…本当に、可愛いな。

そんな君を微笑ましく見てしまう俺は、少し可笑しいのかな。

「那子って、雨っていうか、水みたいだよな。」

「え、どういうこと!？」

「ん？褒めてんの。」

「嘘だあっ！」

「ホント、ホント」

「えーっ？」

「ホント、那子可愛い」

「さらっと言ったね…」

君は本当に、色んな意味で…、

? CLEAR?なのかもしれないな。

純粋な君（後書き）

すみません。

やっぱり駄文。

かなり意味分かりませんでした。

！ 那子は純粹って、ことを言いたかったんだと思いますよ、聖はっ！

あなたが起きているとは知らずに…

空は晴天。

青空が頭上に広がっている。

雲一つない、綺麗な空。

「読書日和だね。」

「那子は本当に、本が好きだよな。」

「まあね。」

今は昼休みを利用して、学校の敷地内にあるベンチに座っている。

私は本を読み、聖君は空を見上げている。

「なーこー、ひまー。」

「聖君も本、持って来ればよかったのに。」

聖君は最近、読書に嫌気がさしたらしい。

「本漬けになるのもヤダ。 那子、膝貸して。」

「膝を何に使うのですか。」

「何って、膝枕。」

「…聖君、眠いんでしょう？」

「最近バイトばっかだから、大変なんだよ…。」

…ああ、そうだった。

聖君は最近、バイトのシフトが増えたんだった。

「…肩なら貸す事はできるよ?」

ドサッ

聖君は私の肩に、頭を預けた。
何か、猫みたい…。

「お疲れ様です。」

「どーも…。」

そう言うってから、規則的な寝息が聞こえてくる。
今の聖君を見ていると、猫みたいで可愛いなあ…。なんて、思っ
てしまっ。

「聖君が起きてないと、何か落ち着かないなあ。」

寂しい、というか…。

ふと、聖君の顔を見してみる。

本当に、綺麗な顔。

通った鼻筋、長い睫毛、潤った唇、少し開いた口…。

「……………」

こんなに綺麗な人が隣にいて、私が何もしないとでも思っているの
だろうか…。

「無防備だな。」

手を頬に添えて、一拍程、間が空いた。

「……………」

「んー……………」

ビクッ！

これで聖君起きてたらヤバイよっ！

何がヤバイのかは、さて置き、自分の心臓が早鐘を打っているのが分かる。

「那子……………」

「え、はいっ!?!」

もしかして、起きてた!?!

「好きだ、あ……………」

「えっ? あれ? ね、寝言…………?」

「スー……………」

また、規則的な寝息が聞こえてきた。

「……………ビクッリしたあ。」

本当に起きてるかと思ったよ…………。

でも、…………キス、しちゃった。

「…無防備な、聖君が悪いんだからね。」

昼休み終了のチャイムが鳴った。

「あつ、聖君、昼休み終わったよ！ 起きてーっ！」

「…なあ、那子」

「…何、かな？」

「保健室で一緒に寝ようぜ。」

今の聖君には、他意はない…、はず。

ただ、眠たいので寝よう。

…そういう意味だ。

「だ、ダメだよ！ 授業出ないとっ！」

私はそう言って、立ち上がった。

その所為で、聖君の頭がベンチに当たった。

「イテッ！」

「ほら、早く行こっ！」

私は一人で校舎へと向かう。

「…ったく。心臓止まるかと思ったじゃねえか。」

ボソツと、

「いきなりキスしやがって。」

小さく呟いた、その言葉を、那子が聞くことは無かった。

あなたが起きているとは知らずに…（後書き）

那子が聖にキスするシーンを書きたかったんだっ！！

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

不意打ち

「那子、一緒に帰ろう」

聖君が迎えに来た。

あの雨の日から、私たちは一緒に下校することが多くなっている。聖君はHRが終わったあとに、一緒に帰ろう。

…と言うわけではなく、いつも靴箱の側で待っていて、一緒に帰ろう。と言ってくるのです。

それが、慣れたのか分からないけど、私の生活の流れの一部となった。

「あ、ゴメンね。これから、先生の手伝いしなきゃいけないから俺もやる。」

「一人でも大丈夫だよ」

「俺もやる」

…聖君つて、以外に頑固なのかな？

「じゃあ、鞆置いて物理室、行こっ」

「物理室？ …まさか、アイツの手伝い？」

「…？ そっだよ」

「やっぱり、俺がやる」

「えっ！？ いや、私の仕事だから、ね！」

そんなこんなで、物理室へGO！

「遅かったじゃないかー、那子君…と、その犬」

「誰が犬だつて？ あゝあゝ？」

「もう、最近の若者は物騒だなあ。」

この人は科学担当兼私達のクラスの担任を受け持っている、かんはやし神林
耀先生。

先生は加奈ちゃんの遠い親戚です。

直接的には、血は繋がっていないんだそうな…。

そして私は先生の助手なのです。

聖君は先生の事が嫌いみたいだけど、なんでだろう…？

「先生、何か手伝う事はありませんか？」

「あー、じゃあ、コレを資料室に運んでくれないか？」

「俺、これ持つから、那子はそれ持つて。」

「え、でもっ…」

そう言つて、聖君はさっさと言つてしまった。

聖君のほづが重いもの持つてる…。

「あいつにも心があつたんだね」

先生はシミジミと、そう言つた。

「…え？」

「いや、こつちの話だよ。」

「じゃあ、これ持って行きますね」

「お願いするよ。 適当なところに置いてくれて良いから。」

適当って…。

「はい」

「聖君！」

「那子、それ重くない？」

「聖君の方が重いでしょ？ 少し持つよ？」

「大丈夫。 それに、那子が持つと危なっかしい」

「…そだね」

私は否定しないで、聖君に持ってもらうことにした。

中学校の頃、無理して重たい物を持って、階段を踏み外して、加奈ちゃんを心配させたことがあるからだ。

聖君はそのまま階段を下りていく。

急いで聖君の隣に行こうとして、小走りになった。
すると…

「キヤッ…！」

「…っ！」

荷物を持っていた所為か、躓いてしまった。

やばい、落っこちる…！

ドサツ、バサバサツ、ガンツ…！

何故か、痛みは無かった。

恐る恐る、目を開けてみる。

辺りには私が放ったプリントの束や、聖君が持ってた重そうな荷物が撒き散らされていた。

じゃあ、聖君は…？

「…？」

「…っ痛」

聖君は私を庇うように抱きかかえていた。勢いで踊り場の壁にぶつかったらしい。

「か、庇ってくれたの…！？」

「大丈夫か？」

「大丈夫…って、聖君怪我してる…！」

怪我は大したことはなさそう。

でも、聖君の手には掠り傷だけど、血が滲み出していた。あとは、壁に背中を強打したに違いない。

「保健室いかないと…」

「いや、大丈夫。舐めときゃ治る。それより、那子。今にも

泣きそうな顔すんなよ」

「だって…」

聖君は短く溜息を漏らす。

「大丈夫だ、って言ってんだろ」

そう言って、私の額に唇を近づける。

「いいか？ 俺はキスできるくらい元気なんだから、大丈夫だって」

「……」

無理をしているのは、目に見えているのに…。

聖君は私を心配させまいと、無理しているみたいだ。

…でも、キスはないでしょ!?

「ほら、立てよ」

聖君は私の手を取って、立たせてくれた。

「その箱、持てるか？」

「うん」

「行くか」

さっきよりも、何だか聖君は歩くのが速くなっている。
そこで、気がついた。

聖君の顔が赤いことに…。

「聖君！」

「何？」

聖君は振り向いてくれない。
きつと、まだ赤いのだろう…。

私は聖君のところまで駆けて行く。
転ばないように注意しながら。
そして…

「ありがとう」

唇を聖君の頬に寄せた。

「先に行ってるからねっ」
「……………」

私は赤面しながら、資料室まで走った。
後に、耳まで赤くなった聖君を残して…。

私だって、恥ずかしいよっ！

聖はその場へたり込んだ。

「…今のは反則だろっ」

那子に、不意打ちされてしまった。

まさか、あのタイミングでキスされるとは…。

どうしよう。

俺は那子のことを、好きすぎている…。

「あゝああ。青春っていいなあ」

その一部始終を、影で見っていた教師がいた。

「そろそろ、結婚しようかなあ」

そして、そんなことをぼやいていた。

不意打ち（後書き）

階段から落ちるシーンを書きたかった。

そして、不意打ち…。

前回はやりましたよね（；、、（

タイトル変えました。

何回も編集してます（；、、（

君との繋がりが欲しくて…

下校途中でのことだった。

加奈ちゃんには茶道のお稽古があるから、読書クラブはいつも早退している。

変わりに聖君がいるから、寂しくない。

そして、聖君と一緒に帰るのが日課になった。

「あのさ、那子。ちゃんと考えてくれてる？」

「ふえ？ 何を？」

「俺の一世一代の告白の返事」

「……！」

あのことは、あまり考えないようにしていた。

あの時のことを思い出すと、どうしても顔が熱くなってしまう。

「か、考えてるけど、まだ返事はできない…かな？」

「そっか」

「ん…」

「でも、俺、諦めないから」

「……」

そんなことを言われても、どう反応すればいいのか分からない。

私だって、初めての経験だし…。

「聖君、私ね、告白されたのって、初めてだから、どう返事をしていいのかわからないの」

「自分が『好き』だって思ったら、OKしていいんじゃないのか？」

「私、聖君のこと好きだけど、まだ友達とは思えない…」

「でも、那子に振られたとしても、また告白すると思う。」

一瞬、間があった。

「…これじゃ、ストーカーか変態か」

聖君はそう言っつて、自嘲気味に笑う。

どうして、聖君はそんなに、私のことを想ってくれているんだろう？

44

「聖君っつて、わたしのどこが好きなの？」

「可愛いとこ、純粹なとこ、友達想いなとこ、一所懸命なとこ…」

聖君は幾つか言っただけど、何故だかキリがないと感じたので、私は慌てて遮った。

「私、そんなにいいところ無いと思うよ？」

「那子は自分のこと、あんまり分かってない。那子にはもっと、いいところがあるんだ」

「そうかな？」

「絶対、そう」

聖君は結構、押しの強いところがあるんだなあ。

何か、加奈ちゃんみたい…。

「しつこいかもしれないけど、好きになったキツカケは？」

「…あの時、言ったことと大体同じ。」

「私が本を無理やり薦めたところ、とか…？」

「まあ、そんなところ」

「本当に？」

聖君は何も言わない。

やっぱり、まだ疑問が残っている。

聞きたい事が沢山ありすぎる。

本当にそれだけで、人を好きになれるものなの？

「それだけで、気になったの…？」

聖君は、何も言ってくれない。

「ねえ」

「っっ、那子っ！」

「はいっ！？」

突然、怒鳴られたので、条件反射でおっかなびっくりの返事をしてしまった。

怒鳴る、というか、ただ大きな声を出したっていうか…。

我慢の限界で、溜めていた空気が一気に出た、というか…。

そんな感じだった。

「那子、思い出すと恥ずかしくなるから、あんまり聞くな…」

「…うん、わかった」

そう言つて、聖君は私から顔を背けてしまった。
一瞬見えたけど、聖君の顔は、林檎のように赤くなっている。
こつこつ聖君を見ると、可愛いな。と、思う。

私は、聖君のこつこついう所が好き。なんだと思う。

「聖君、いつもありがとね。」

聖君は毎日、私を家まで送ってくれる。
すごく有難い。

「送るぐらい、別にどうってことないから。」

「でも、ありがと」

「…ん」

聖君はまた、赤面した。
顔を腕で隠している。

うう、可愛い。

「あ、そうだ。 聖君、アドレス教えて！」

聖君とは友達になつたのに、まだメールアドレスを交換していないのに、今やっと気付いた。
聖君、申し訳ない…。

「…じゃ、那子。携帯貸して」
「え、あ、うん、はい。」

最近の携帯には赤外線とかがあるけど、私是一向にその使い方を知らうとしない。

メールは早くなってきたけど、他の機能には、あまり手を付けていない。

「ゴメンね、今まで気付かなくて。」

「いいよ。…ほら、これ俺の」

聖君は赤外線ではなく、私の携帯の電話帳に、自分のアドレスやケ―番を入力しただけだった。

「ありがと！ あ、私のは…」

「那子から送ってきて」

「え…？」

聖君が言った意味が、理解できなかった。
どういふこと…？

「今日、俺にメールして。そしたら、那子のアドレス分かるから」

「え、でも、今やっても…」

「じゃ、明日な」

「あつ、聖君！」

聖君はダッシュで帰って行ってしまった。

君との繋がりが欲しくて…（後書き）

ずっと、進展が無い状態だったので、中間点。みたいな感じ。
聖君は大胆ですが、恥ずかしがりやなのですよ。
赤面シーンがすごく多い。ですよね？

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

メール＝難しい

「…どうしよう」

私はとりあえず、家の中に入る。

「ただいま」

自分の部屋に移動しながら、今のやり取りを整理している。

「…いつ、メール送ればいいのかな。」

因みに、私は今、一人暮らしである。

母親は、私が幼い頃に、事故で亡くなってしまった。

父親は、私が中学生の頃から単身赴任中で、外国にいる。

多分、今はアメリカにいるはずだ。

更に、一人っ子なので、兄弟や姉妹はいない。

家に帰れば、いつも一人だ。

中学校までは祖父母の家にしたけど、高校生からは自宅で一人暮らししようと決めていたから…。

まあ、そんなことは置いといて…。

夕食の用意をしながら、メールのことを考える。

「ん、今じゃなくて、夜かな。よし、夜にメールしよう。」

そして、今日の夕食はシチューにしよう。
まだ、この前使ったルーが残っていたはず…。

神林宅

そこは、高層マンションの一番上だった。
ガラス窓から見る外は、一面ビルと少ししか見えない空がある。

その頃、永野 聖は悩まされていた。

那子からはいつ、メールが来るんだ…。

そこへ、従兄の神林耀がやってきた。
聖が通っている学校の科学の教師をしている。
因みに、斎条の親戚でもある。

詳しく言うと、俺の母親の兄の息子。
そして、俺の母親の兄の奥さんの母方の家系 つまり耀の母親の母
方の家系 と斎条の母方の家が親戚なのだ。
…ややこしい。

「お前、何 悶えてんの？ 発情期？」
「うつせえな。 テメエは黙ってる、このロリコン万年発情期が」
「うつわあ、下宿させてあげてる家主に、その言い方は無いんじゃないの？」

2人の顔には怒りマークが浮かんでいるように見える。
黒いオーラが2人を纏っている感じもする。

「あ、あれだな。 那子ちゃんだろ」

バシィツ！！

耀の顔に鞆が投げつけられた。

「つてーなあ！ オイ！」

「ああ、ワリイ。 手が滑った。」

聖は明らかに、見え透いた嘘をついた。

「手え、滑るわけねえだろ！ お前、今、何も持ってなかったぞ！」

「いいから、飯作れよ」

「はあ？ 今日の飯当番は聖だろ。」

「作る気、失せた。」

それからというものの、茶番劇のような喧嘩が続いた。

嵐宅

時刻は9時を回っている。

「ふう、どごしよごし…」

那子は携帯を手にし、苦悩していた。
聖にメールするかしないかを、まだ悩んでいたのだ。

「よしっ」

那子は意を決して、「新規メール作成」の欄で、決定ボタンを押した。

メール「難しい」(後書き)

結構編集して、短くしたりしてます。

そんなことは、お構いなく読んでいただきたいと思っています。
よろしく、お願いします。

冗談は真に受けるな

〜

ガバツ！

聖の携帯から着信音が鳴った。

聖は寝ていたベッドから起き上がり、携帯に飛びついた。

案の定、それは那子からだった。

顔には出さないが、内心、すごく喜んでいた。

- - - - -

To 那子

No Title

>本文<

今、オススメの本なんてある？

私は「Blue Wing」って本を読んでいる途中なんだけど…

メールまで本のことばかりでゴメンネ

ドスッ バンッ！

「…ありや、片恋男子の末期だな。」

聖は殴つて、耀を部屋から追い出した。

何であんな奴が教師やってんだ…。 つーか、何で従兄なんだ。

これだけはどうしても覆せない事実には、聖は深い溜息をついた。

「…メール来たはいいものの、どう返事をしろっていうんだよ。」

聖もまた、苦悩に苛まれるのであった。

「あれで良かったのかな？ 呆れられたかも…」

）
）

「あ、聖君から…」

TO 那子の彼氏

NO Title

「彼氏!？」

これって聖君が設定したの!？

那子は驚きすぎて、一瞬硬直した。

聖は送信者名に、「こう出るように設定したらしい。

.....
>本文<

今は「月光」を読んでもるけど、内容が微妙だった。

しつこいけど、俺の彼女になってよ。

・ E N D ・

.....

最後の文には、束縛感がなく、素直な気持ちが出てあった。

聖は無言で、携帯の画面を見詰めていた。

冗談は真に受けるな（後書き）

色々編集中心でございます。

気にしないで読み進めていただければいいと思っております。

もっと分かって欲しいんだ…

〽
〽

那子の部屋に着信音が鳴り響いた。

(電話…？ 聖君から？)

ちよっと、意地悪し過ぎたかな。と思いながら、ボタンを押した。

ピッ

「聖君？」

『今さ、メール見たんだけど』

携帯越しの聖の声は、心なしか冷たく聞こえる。

やっぱり、怒ってるのかな？

だけど、聖からは怒ってるような口調は、あまり感じられない。

「あ、ゴメンね。 聖君があんな設定したから、つい意地悪したくなっちゃって…」

『真に受けていい？ それ』
「え？」

最初、那子は何を言っているのか分からなかった。
那子の頭の回転はそれほど速くはないので、思考回路が停止すること
も度々あるのだ。

『俺が、那子の気に入る小説、書いたらさ、付き合ってくれろ？』
「ひ、聖君！ 別に、そんなことっ、しなくてもっ…！」

まずい、誤解されてるっていうか、本当にやる気になっちゃった
かもっ！

『那子』
「な、何？」

聖の唐突な言葉に、那子は焦った。
意地悪な軽い気持ちで送ったメールが、聖が真に受けていると知っ
て、とても驚いていた。

『俺が那子の気に入る小説を書いたら、付き合っ』
「え…」

『ダメ…か？』
「…あ、ゴメンね。 急で、頭の回転が鈍ってるみたいなの。 ち
よっと、待って…」
『ん』

那子は、数秒間、考えた。

「つまり、聖君は、私が気に入る小説を書けば、付き合ってくれる

「思ってるんだよね…?」

『うん』

「あれ、嘘なんだよ…?」

『でも、那子には俺が書いたモノを、読んで欲しい。』

「…本当に?」

『俺がそうしたいだけなんだ、マジで。那子に、わかって欲しい。』

『俺の気持ち、どうしても』

聖は本当にそう思っているのだが、どうしても、那子は聖が思い違いをしているんじゃないか。と、思ってしまうのだ。

軽い気持ちだったはずの『嘘』が、こんな風になるとは思わなかった。

「聖君がそうしたいなら、私は何も言わないけど…」

『だから、待ってて』

「うん、待つよ」

那子の軽い『嘘』から、こんなことになるなんて本人は信じられない。とでも言う思いだった。

ただ、その所為で、聖と接する時間が少なくなるのではないかと、心配なのだ。

『那子が気に入るような小説、書くから。絶対』

「でも、聖君とは今まで通り接したいし…」

『それは大丈夫。那子と一緒にいないと、小説書けないから』

「え、それ。どういう…」

『もう遅いから、切る。また、明日。迎えに行くから』

「え? あ、うん。って、ええ!？」

『お休み』

「待って、聖君!？」

ツー… ツー…

聖に一方向的に通話を断たれた那子は、不安で仕方が無かった。

「聖君、大丈夫かな？」

「ただ、楽しみでもあった。」

「よし、今日から頑張ろう。」

聖は決意を固め、那子の為に、心を込めて小説を書くのだった。

大好きな君の為に、愛を込めて…

もっと分かって欲しいんだ…（後書き）

聖は那子のことを、本当に想っているんです。
ただ、それだけを。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

編集して短くなったり、タイトル変わったりしてますが、
気にしないで読み進めてください。

君の言葉とその笑顔

「何で？ 何で無いの!？」

私は無くなってしまった本を探している最中です。

昼休みまではちゃんとあった筈の本が、鞆の中に入っていないので、とても焦っているところです。

図書室の本だから、失くしたら買い直さないといけないし…。

「那子？ どうしたの？」

「加奈ちゃん…」

図書室にまだ来ていない私を探しに来たのか、加奈ちゃんが声をかけてくれた。

私は今にも泣きそうな顔で、加奈ちゃんを見た。

「図書室で借りた本、失くしちゃった…」

「どこかに落ちてるかもよ？ 探すの手伝うから、心当たりがあるなら教えて？」

「昼休みに中庭に行って、教室まで持ってきたはずんだけど…」

「じゃ、私は中庭に行って来るから、那子は他のトコ探してみて！」

「うん、ありがとう。 加奈ちゃん」

加奈ちゃんはダッシュユで、中庭の方へ行ってしまった。
持つべきものは友達だあ〜…。
なんて、シミジミ思っけていても仕方がない。
私は一応、図書室に行ってみた。

図書室の戸を開けた。

図書室には最近図書委員になったばかりの、聖君がいた。
他にも担当の人はいるけど、部活があるから。と、聖君が殆ど仕事を
している状態だ。

今日も、本の整理をしたりと、大変そうだ。

私も図書委員が良かったけど、委員になったらなつたで、仕事が忙
しい。

読書クラブなんて続けられない。

一時期なつたことはあるけど、3カ月でやめたと思う。

他の委員の人が全くしなかつたから…。

「那子、どうした？」

聖君はカウンターで、何かを書いていた。

私からは書いている内容は見えない。

「あ、聖君。 私ね、借りた本、失くしちゃつたみたいで、あの…」
「…本？ 中庭に落ちてたけど、那子の？」

聖君はカウンターに置いてあった本をとって、私に見せた。タイトルは『world』。最近、借りている本が英語のタイトルばかりのような気がする。

「あ！ それだ！」

「落ちてたから、貸し出し書、見てたんだ。そしたら、那子が借りてたから、後で渡そうと…」

「聖君！ ありがとう！」

私はホツとして、本を受け取りながら安堵の溜息を漏らした。本当によかったあ…。

「もう、失くすなよ。図書室の本なんだから。」

「うん！ 本当にありがとう！」

聖君は照れくさそうに、顔を背けた。

そこで、那子は思い出した。

「あ、加奈ちゃんにも探してもらってたんだった！」

「斎条も？」

「うん、きっと中庭にいると思うから、行くな！」

那子は無意識に本をカウンターに置いた。

「ん」

「また後で来るから！」

「わかった」

那子はすぐに、走り出した。

本をカウンターに置いたのも忘れて…。

那子の姿を見送りながら、聖は不意にカウンターを見た。

忙しい奴だな。 本、また置いて行つた。

そう思つた後、慌しい声がかげられた。

「聖君！」

ビクッ

突然、那子に呼ばれたので、聖は驚いた。
普通に見ただけでは、驚いたのかどうかも怪しいが…。

「本当にありがとう！」

そう言つて、那子は満面の笑みを残してから、去つていった。

「…別に、俺は何もしてないのにな」

でも、こうして感謝されるのも悪くはない、な…。

そう思つた聖だった。

君の言葉とその笑顔（後書き）

あっさりと終わってしまった…。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

一つ屋根の下

「聖君、帰ろう?」

「ああ、今行く」

那子は図書室にあるカウンターに向かつて言った。

あの、聖の『勝手に解釈した誤解メール事件』から、約一ヶ月が経とうとしていた。

聖はあの日から、懸命に小説を書いているらしい。ただ、那子の為だけに…。

そんな一途な思いは、那子にはまだ届いていなかった。

「加奈ちゃん、今日もお稽古だった」

「…華道の?」

「そうなの! …今日はね。」

「一昨日は茶道だったっけ?」

「うん…」

那子は少し落ち込んだように返事をした。その反応に気付いた聖は、何となく問う。

「寂しい…のか?」

「まあね。でも、仕方ないし」

「……」

「あ！ でっ、でもね！」

「ん？」

「聖君がいるから、そんなに寂しくないっていうか！ えー、と……」

その答えに、聖の顔が少し、ほころんだ。ように見えた。

那子とはまだ友達止まりなのだが、友人の加奈よりはまだ位が上のようだ。

「那子、突然なんだけどさ」

「何？」

「今日、俺の家、来ないか？」

「……」

那子は一瞬、きよとん……とした顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「いいの？」

「那子さえ、よければ……」

「じゃあ、お邪魔しようかなあ」

「どうする？ このまま来るか？」

「んー、そうする」

何故か聖はとても喜ばしい感情の波に襲われた。

誘うのには、それだけの勇気があるし、断られるのではないかという、不安もあった。

だけど、今はとても嬉しい。

「俺の家、ちょっと……っていうか、かなり遠いけど」

「大丈夫だよ。だってあそこでしょ？」

そう言つて、那子は前方にある建物 マンションを指差した。
聖は驚いた。というよつな顔をした。

「…知つてたのか？」

「うん。ちよつと前に聖君、言つてなかつたっけ？」

そう言われてみれば、言つたよつな気もしなくは無い。
だが、記憶が曖昧過ぎて、思い出すことができない。

そして、帰路へ歩を進める。

神林宅

表札は横長で『神林耀』の下に『永野聖』と、おそらく油性のペン
で小さく書いてある。

俺がこの家に転がり込んだ時に、書き足されたものだ。

「ただいま」

…つて、言つても、誰もいないんだけどな。

と、思いながらも、癖なので仕方が無い。

「お邪魔します…つて、うわっ。 聖君の家つて広いんだね」

リビングを見るなり、那子は驚いて感嘆の声を上げる。
那子の方が大分デカイと思うのだが…。

「そこら辺で寛いでて。 コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

「じゃあ、紅茶で」

「結構、種類あるけど…」

「どれくらい？」

那子はキッチンに駆け寄ってきた。

初めて見たが、この紅茶の種類、尋常じゃない。

絶対アイツの趣味だな！

棚からは、ダーズリン、アッサム、アールグレイ、セイロン、ウバなど、その他フレーバーティーが、沢山あった。

こんなに種類があるとは思ってなかった。

いつもコーヒーや紅茶を淹れるのは、アイツがやってたしな…。

一応、俺にもそれなりの知識はある。

「すごいねえ」

「これ全部、従兄の趣味だから…」

「でも、これだけあったら、喫茶店でもできそうだよね！」

「いや、そんな気楽に経営したら、店、潰れるから」

那子のいかにも天然さながらな言葉を聞きながら、俺の部屋へと向かった。

「聖君の部屋にパソコンがっ！」

「驚くところなのか、そこ」

那子はいつも驚くところが根本的に違うと思う。
ノートパソコンに驚く、今時の女子高生は那子ぐらいだろうな。

「だって、私 持ってないし。 使いこなせないし…。」

「まあ、色々機能あって便利だけど、使いこなせないと、意味無い
しな。」

「だよねえ。」

「…ん？ 電源付いてる」

まさか、アイツが勝手に…？

被害妄想はやめておこう。

不安要素が沢山あり過ぎる…。

「聖君、面白そうな本、沢山持つてるね〜」

「そうか？」

「うん、聖君は面白い本を探す天才なのかも！」

そんなことを那子は無邪気に言う。

俺の本棚には大体10冊しか本がない。

これを『沢山』と言うだろうか？

それに、面白いとは思ったけど、読み返してはいない。

… 那子とは違う。

「私、こういうの好きだな」

「……」

那子は屈んで、本のタイトルを見ている。

俺はつい、そんな那子に見入ってしまった。

本を見ている那子の横顔は、さっきまでの少女のあどけなさよりも、

女の色っぽさがあるような…。

何か、こういうのは新鮮な感じがする。

那子は気づいているだろうか。

一つ屋根の下、男女が2人。

俺が何かしないとでも、思っているのだろうか…。

一つ屋根の下（後書き）

聖は結構けしからん子ですよ…。（笑）

編集して短くしました。

君の一番になれるように...

そこで、俺は何を考えていたんだ。と、自制する。

「俺 ケーキとってくる。」

「あ...、うん」

俺はすぐに部屋から出た。

いくらなんでも、那子は無防備すぎではないだろうか。

...というか、俺がただ単に変態なだけなんじゃ。

あー、そうかも。俺、かなりヤバイな。

冷蔵庫からケーキを取り出す。

俺は甘いものはそれ程好きでもないから、那子の分だけだ。

昨日、アイツが知り合いから貰ったものらしいけど、気にしない。

少し、ここで頭を冷そうと、コップに冷水を入れ、一気に飲み干した。

まだ、顔が火照っているようだ。

那子が家に来ている所為だろうか？

それとも那子を見て、変な想像をしてしまったからだろうか？

変な想像と言っても、そんな想像ではなく…以下略。

那子を待たせるのも悪いので、部屋に向かった。

部屋に戻ると、那子は俺の机を凝視していた。

何かを見ているような、俺が見られたくないものを見ているような…。

「っ！」

「あ！ ゴメンねっ、勝手に…」

……見られたのか？ アレを？

那子はパソコンの画面を見ていた。

しかも、俺が執筆中の小説を…。

まあ、いつか見られるものだから問題はないのだが、恥ずかしいよ
うな、なんというか…。

ああ！ なんかもう、恥ずかしいなあっ…！

「何、見てた？」

「え、と。コレ、小説だよな？」

「ああ。」

俺が怒っていると思っっているのか、那子は少し怯えているようだ。違う！

人生初の執筆中の小説を見られて、恥ずかしいんだっ！

「この小説の続きを、早く見たいなあ。なんて、思ってみたりして…」

「…マジで？」

「うん」

「そ、か。じゃあさ」

「うん…？」

少し、間があつた。

そして、言った…。

「俺、那子が一番好きな作者になってみせるから…え？」

那子はきよとん、とした顔でこっちを見る。

ああ、愛らしい。

愛しい。

「コレ、聖君が書いたの？」

言葉の代わりに、頷いて見せた。

そうしたら、那子は言った。

「うん、楽しみにしてるね。この小説、途中しか見てないけど、すごく面白いよー！」

那子は俺に微笑んだ。

それはまるで、天使のような…。

君の一番になれるように…（後書き）

聖はちゃっかり告白してますね。
なんなんだ、コイツは。

編集して、短くしています。

夕暮れの図書室で

高校に入学して、日も浅かった。
毎日毎日、喧嘩ばかり売られて、不良説は流れるし、友達はできないし、最悪で退屈だった。
いつだったかの放課後、家に帰るのも面倒だから、図書室で暇をつぶそうと思っていたときだった。

那子に会ったのは…。

「痛ってえーなー、あの野郎…」

俺は喧嘩中、相手から腹に一発入れられたのだ。
本棚に半ば倒れこむように、横向きでもたれかかった。
そこで思ったのは、腹筋鍛えてて良かった、だ。
なんと空しいことか…。

1人で10人も大分キツイのに、今日の相手は15人だった。
しかもバットも、持ってやがるし…。
別に喧嘩に慣れてるわけでも、好きなわけでもないのに、毎日毎日…。
思わず、溜息が漏れる。

俺がそんなに怖えんだったら、喧嘩なんて売らなけりゃいいのに…。
俺は意外と小心者だと思う…、のだが、気がついたら喧嘩してる。何をやりたいんだ、俺は…、と、自分でも分からなくなる。

その時だった…。

「あ、あの、そこ、避けてもらっても、い、いですか？」
「……………」

震えた声がしたから、顔を、というより目だけを動かして、後ろを見た。

視界には映らなかつたから、視線を下げてみたら、小柄な女がいた。多分、同じクラスだった筈…。

「あの、そこ…」

「あ、悪い」

言われてた内容をすっかり忘れて、その子をずっと見てしまっていた。

睨まれた、とか思われてそうだな。

この吊りあがっている目、どうにかならないものか…。

「んっっ」

少女と違っていい風貌の、その子を見ると、背伸びをして本を取ろうとしている。

あと少して手が届くのに、どうしても取れない。

その光景が微笑ましくて、つい、笑みが零れた。

「クツ…、クク」

「っんな！」

「ク、フフ、ハハハツ…！」

「わ、笑わないで下さい！」

どうしても笑いが堪えられなくて、腹を抱えて大笑い…、いや、爆笑していた。

その間、その子はずっと怒っていたような気がする。

こんなに笑ったのはいつ以来だったろうか…。
それぐらい、笑った。

「…はあ。ほら、本とってやるから、もう怒んなよ」

「…っ！」

ひよい、と本を簡単にとってやると、不貞腐れながらも礼を言った。

「…ありがとうございます」

「それにしても、小せえな」

「何か言いましたかっ!？」

小さな独り言は、ちゃんと聞かれていた。

その後、俺はその子が気になって、本を読んでいるのを隣で眺めていた。

夕暮れの図書室で（後書き）

聖視点

聖はこんなに多くは語らない…。

そして、聖も意外と純情だったりする。

短くしました。

一目惚れ、初恋、恋心

「…その本、そんなに面白いのか？」

「面白いよ！ すっごく」

「飽きねえの？」

「全然飽きないよ」

さっき、少女の名前を聞いたら『嵐 那子』と言った。

出席番号が1番だから、見覚えはあった。

その『嵐 那子』は、俺のことは知らないらしい。

校内で俺のことは不良で有名だと、誰もが言うと思うが…。
情報に乏しい所為だろうか？

「私は前に読んだから、永野君、読んで見ない？」

「…は？」

「読んでみてよ！ これ面白いから、ね！」

いや、ね！って、言われても、俺は本はあまり読まないし…。

「読んでくれるまで、学校から出さないんだから！」

「いや、こつちにも事情が…」

「やだ！ 感想も聞くんだからね！」

「……………」

那子は強引に本を読ませたけど、その本は何となく、主人公が俺に似ていた。

共感もできたし、境遇が俺と同じだったっていうのもある。

本のタイトルは『青空』だった。

内容はあまり言いたくないが、総合的に言えば、良い話だ。

…と、那子に言うと、那子は饒舌に話し始めた。

大人しい子に限って、趣味や好きなことになる、口が達者になるんだよな。

「そうでしょう？ コレ、私も好きなの！」

そう言った那子の笑顔は、すごく可愛かった。

なんというか、満面の笑みというか、蕾だった花が満開になったと
言うか…。

そんな感じの笑顔だった。

花のように綺麗な、可愛い笑顔だった。

その笑顔を見た瞬間、俺は顔が熱くなるのを感じた。

その時、俺の顔は赤くなっていたのだろうか？

それが俺の初恋でもあったし、那子に一目惚れした瞬間でもあった。

一瞬、静かになった俺を見て、那子は心配そうに、俺の顔を覗き込んだ。

「永野君？ どうしたの？」

「…何でもない。」

「あ！ もう、こんな時間だあ」

「送っていいんか？」

「ううん、大丈夫。 加奈ちゃんが待ってるから」
「そうか」

那子は図書委員だったらしく、鍵を持っていた。
俺が図書室から出ると、扉の鍵をかけた。

「じゃあ、また明日ね！」

「ああ」

また、俺にその笑顔を向け、職員室へと走り去った。

ヤバイ、俺、……惚れたかも。

また熱が込み上げてくるのを感じる。

体中の熱が、心臓に向かって駆け上がってくるような……。
顔が熱くなる。

そして、俺は階段を下りて行った。

それからと言うものの、事故があり、一ヶ月学校を休む事になった。
惚れてから約2ヶ月で、やっと告白できたはいいけど、返事はまだ
貰えていない。

一体、このもどかしい気持ちがいっままで続くのやら……。

「聖君！ 早くっ」

屋上の扉から、那子が俺を呼ぶ声がした。

今では『永野君』から『聖君』に昇格したのだ。

これでも、進歩したような気はする…。

でも、俺は那子からの返事を聞くまで、いつまでも待っただろう。

多分、そう長くはかからないと思う。

だから、それまでは…

「ああ、今 行く」

どうか、それまでは、那子と一緒にいたい…。

虹の迷信

「ねえねえ、聖君！」

「どうした…?」

那子はすごい勢いで俺に叫んだ。

何かを見ている。

「虹が架かってるよ！ 屋上に行こうよ！」

そう言うなり、俺の腕を引っ張っていこうとする。

梅雨の時期だから、カラッと晴れるのは滅多に無い。

その所為か、那子はとても元気があるようだ。

「はーやーくーうっ！」

「はい、はい」

半ば、引きずられるようにして、屋上に行った。

「ほら、見て！」

「おー、デカイ虹だな」

「でしょ？ 近くにあるみたいだよね！」

「そうだな」

那子は俺が適当に相槌を打っていることに気付いているのだろうか？
俺が虹ではなく、那子を見ていることも…。

「聖君、知ってる？ 虹の終わりには宝物があるんだよ！」

「ああ、迷信じゃないのか？」

「お話の中だけなんだろうけど、あつたら良いよね？」

「…那子は、その宝物、何だと思ってるんだ？」

なんだか聞いてみたくなかったので、問いに問いで答えてしまった。

反応も面白そうだ。

きっと、那子だから困った顔をするんじゃないかな。

「え？」

那子は困ったように聞き返す。

やっぱりな。

困った顔も、可愛い…。

「…うーん、そうだなあ。」

那子は指を顎に当てて、考えているようだ。

唸って、考えている姿も、また愛らしい。

それから、俺は別に、変態じゃない。

「パンドラの箱みたいに、最後には？希望？が入ってたり…。な
くんでね」

「いや、そうかもしれないだろ？」

「そうかな？」

「探してみるか？」

「え？でも、もうダメだよ。虹が消えかかっちゃってるから…」

話しているうちに、虹は消えかかっていた。

空はキャンパスのように、青く描かれていて、虹を呑み込もうとしているかのようだ。

「そうだ！虹を見ると幸せになれる。って、いってお話もあるよね
！」

「まあ、虹なんて気象現象で、科学的なものだからなあ。」

「…聖君は、ユーモアがない！」

「はい、はい」

そう言って、背の小さい那子の頭を軽く叩く。

「…俺が、”宝物？見つけてやるよ」

「…どんなの？」

「おたのしみ」

「ええ〜っ」

…。
いつか虹の迷信なんかより、もっとすごい”宝物？”見つけるから

虹の迷信（後書き）

短いし、意味がわからないですね。
いや、虹を題材にしたのが、いけなかった。

君は太陽

「あつづくいいーよお」

「那子、扇風機を一人で独占しないでよ」

「だって暑いんだもん」

梅雨が明けてすぐ、太陽がギラギラと眩しく輝いた。

それから一週間か二週間はとても暑い日が続いている。

今も、太陽が建物の屋根を照り付けている。

その所為で、学校の中もサウナのように暑く感じる。

「図書室がこんなに暑くなるなんて、思わなかったわね」

「本当だよね」。 図書館ならクーラー効いてて快適だけど」

那子は暑すぎて、語尾が間延びしている。

那子の親友・斎条 加奈は扇子を持ち込み、扇いでいる。

そして俺、永井 聖はその光景を眺めながら、読書中だ。

「今はクーラー、使えないのよね」

「ねえ〜？ 酷いよね？ 拷問だよお」

そう、この夏真っ盛りだというのに、肝心のクーラーが故障した。

原因は、寿命だろう。

機械も寿命には逆らえないらしい。

「海にもいきたーいい〜よぉ〜」

「はいはい」

「…今度行くか？ 海」

俺の言葉に反応したらしい、那子は瞳を輝かせてこちらを向いた。斎条は疑惑の目でこちらを睨みつけている。

コイツは元々、男を虜にする美貌がある所為か、その姿が妙に妖艶である。

俺以外の男はその姿にそそるだろう。

俺以外の男は…！

「従兄が海に行く予定があるから、連れて行って…」

くれる。と、言い終わらないうちに、那子は言う。

「連れて行ってくださいゃい…！」

興奮状態なのか、最後の言葉に拗音が混じった。それが何処か可愛らしい。

「…従兄って、神林先生の事？」

「ああ、まーな」

聞いてきたのは斎条だ。

斎条はアイツ 神林耀の親戚だから、こっちの事情も聞いているかもしれない。

斎条からそのことについては、特に聞かれていないが、興味が無いだけだろう。

「へえ、先生も海に行くなら、大丈夫だね」
「大人がいれば、責任もそっちに行くしね」

那子は安心した表情を浮かべた。

まあ、指導する立場の人間がいたら、安堵するのだろう。
だが、アイツは信用できない。

それから斎条だ。

斎条が海に行つて何かやらないように、見張つておく必要があるな。

コイツなら、何かしかねない。

…何かはわからないが、何かだ。

「ねえ、海にはいつ行くの？」

「確か、夏休み入つてすぐだった気がする…」

「確か、夏休みに入ってから一週間後だったかしら」

「そうなの!？」

「…何でお前が知つてんだ」

「情報は何故か耳に入ってくるのよね、フフ…」

斎条は奇妙に笑った。

俺はコイツの事はあまり好きではない。

何を考えているのか、全くわからないし、不気味だ。

「まあ、取り合えず、私の家に来ない？ 涼しいわよ」

「行きます!」

「永野君は？」

「…俺はいい」

そう答えると、斎条は微笑んだ。

不気味に…！

「そう。じゃあ、今日は邪魔者はいないのね」

「お前、俺のこと『邪魔者』って言ったか？」

「だって、最近は那子と一緒にいられないんですもの」
「……」

斎条は立ち上がって、那子の手を引いた。

「行こう、那子」

「うん！」

那子は笑顔で答えた。

「聖君、またね！」

「ああ、またな」

2人が図書室からいなくなると、俺は立ち上がった。
そして、一つの窓に近づいて、開けた。

「…っ」

俺は咄嗟に、目を眇めた。

目を眇めたのは眩い太陽のせいだ。

窓からは太陽の光が剣のように差し込んでいた。

徐々に目を開けていくと、玄関から元気に飛び出す生徒達。

暑い中、外でランニングをする運動部、外でカメラを手にしている
写真部や、デッサンをしている美術部。

文化部に分類されている筈の吹奏楽部が、ランニングしている姿を

眺めていた。
吹奏楽部でも、体力づくりやらをするんだな。

「…眩しいなあ」

俺は、太陽を直視した。

太陽を直接見ると、太陽から放射される有害な紫外線が目に入って体に悪い。

とか、何とか昔に言われたことがある。

「太陽か。 … 那子みたいだな」

俺は独り言を言うと、自然に笑みが零れた。

何なんだ、俺。

変態だ。って、何も知らない他人に思われそうだな。

でも、那子は太陽みたいに俺を照らしてくれるような存在なんだ。
本当、キラキラ輝いてるような…。

「…海、どうしようかな」

唐突に、夏休みに、海に行く事を思い出した。

那子の水着姿、見られるかも…。

変態思考が頭を過ぎったので、ブンブんと、頭を振った。

…よし、俺も帰るとしよう。

今から、海に行けるのを楽しみにしておこうかな。

那子のはしゃぐ姿もみたい。

早く夏休みにならないかな。と思いながら、軽やかな足取りで家まで走る。

赤い夕日に見送られながら…。

君は太陽（後書き）

更新まで長かった。

ついでに、聖君！モノローグ長い！！

短くしました。

夏だ！海だ！！青春だ！！！！

キラキラと太陽が照りつける中、俺たちは今、海にいる。

「夏だ！海だ！！ビキニだ！！！！」

「うるせえっ！」

俺は従兄 耀を蹴り飛ばした。

海に来ているのは、耀がここに来る用事があったからだ。

ついでに夏休みなので遊びたい。というのが、俺たちの本音でもある。

そして、那子と斎条が行きたいと言うので、俺が耀に頼んだのだ。

それにしても、暑い。

暑すぎる。

「つて、ゆつかさあ、聖」

「…んだよ、変態」

「両手に花だよ。女の子2人、連れてきちゃってさ」

「あゝあゝ？」

「どーせ、夜這いしてニャンニャンする…」

ドカッ バキッ

耀の頭にはコブが2つできていた。
勿論、俺が殴ったからだ。
手が痛い。

「聖君！ 早く行こっ」

「那子、走ったら危ないって」

声をかけたのは、那子だ。

そんな那子を、斎条は嗜める。

仲の良い姉妹に、見えなくもない。

そして、その2人の姿は…。

水着だ。

海に来たのだから、当たり前だが…。
俺は那子の水着を見て、凍結^{フリーズ}した。

「…え」

「おお、ボリリュームが…」

ドスッ

近くの海の家に更衣室があるので、そこで着替えてきた2人の水着は、あれだ。

斎条は水着の種類で言うと、「タンキニ？」というものを着ていた。
横からの露出がワザトらしい様な気がしなくもない。

那子は、意外と露出が…。

「欲情しそう？」

「うっせえ…」

斎条が横で何かいつてきたから、俺は一言だけ言い放った。
まあ、それは無視しよう。

那子の姿は、何と言うか、エロイ。
ビキニなのだが、可愛いピンクの水玉柄の水着なのだが、エロ
イ。

「……………」

「聖君、どうしたの？」

「いや……………」

「あ、聖はねえ……………」

耀は俺をチラッと、盗み見て言った。

「那子ちゃんのビキニ姿に、欲情してるんだよ……………」

ドゴッ

俺は耀に鉄拳をくれてやった。
当然だ。

「折角、海に来たんだから、喧嘩したらダメだよ！」

俺はそう、那子に言われたので、とりあえず耀から離れた。
それからまた、海に行こう。と、誘われた。

「……………」 斎条と行って来いよ。俺、ここにいるから……………」

「え……………」

那子はまたあの、きよとん…。とした顔で俺を見た。

「さあ、那子、行くわよ」

「聖君もいないと、楽しくないよお」

那子は齋条にズルズルと引きずられていった。

「俺は那子を見て、ついアソ…」

ドゴオッ…!

俺に代わってナレーションをしようとした耀に、またもや脳天に鉄拳をくれてやった。

「謝罪は？」

「ども、すみませんっした」

「……」

誠意のこもっていない謝罪に、少しイラッときたが、手が痛いので止めておこじ。

「いや、ここには水着美女が沢山いるね」

「なに、双眼鏡持って、ヨダレ垂らしてんだよ」

「垂らしてませんっ」

那子たちが海で遊んでいる間、俺はパラソルの下で、コイツと2人つきりだ。

そして、コイツはたびたびナンパされる。所謂、逆ナンというヤツだ。

ああ、楽しくない。

「あの人はEぐらいかな」

「見定めんの、やめろよ」

「…あ、那子ちゃん達がナンパされてる」

「あゝあゝ！？」

「ほら、あそこ」

ホレと言いながら、耀は近くの岩場を指差した。

そこには、那子と斎条が、いかにもチャラそうな男に囲まれていた。

無意識に、俺の体は動いていた。

「おい、聖！」

俺はそこまで走っていった。

砂で足がとられるが、全速力で走った。

「…俺も、向こう行こうかなあ」

カッコイイとこ見せたいし。と、耀は立ち上がった。

夏だ！海だ！！青春だ！！！！（後書き）

耀さん好きだよ。

うん。

そして、聖は誰を相手にしても勝てるのだ。

すごいのだ！

裏設定があるから、ここから明らかにしていきたい…。

“栄光”という名の自慢話

「おい！」

聖は息を切らせて、一言叫んだ。

すると、男共は、俺を一齐に睨み付けた。

その腕にはタトゥーをしていたり、入れ墨を入れていたりしている。

「あゝあゝ？」

「何？ この子たちのカレシ気取りか？」

那子は俺に潤んだ目を向けていた。

聖は吠えるように言った。

「そうだ！ 俺は那子の彼氏だ！」

これを言うのにも、結構勇気があるのだろう。

聖是那子の方を見ると、顔を赤らめている姿が目に入った。
その隣にいる加奈は、呆れた顔をしている。

「ハッ！ 笑わせんじゃねえよ！」

ヘッドらしい男が言うと、男共は一斉に殴り掛かってきた。

こいつ等、動き遅いな…。

「ガハッ」

聖が鳩尾に拳を入れただけで、男共は気絶した。最後に残ったのは、やはりヘッドの男だった。

「…ガキのくせに」

聖は前に歩を進めた。

男は殴りかかろうとする。

聖はそれを容易く避けた。

「大人、ナメテンじゃねえぞ！」

男は聖の背後に周り、隠し持っていたナイフを振り上げた。流石の聖も冷や汗が、顔に一筋流れた。

ヒュンッ…！

無理だ。避けきれないっ…！

ナイフが聖に振り下ろされる。

聖が目を閉じてしまった瞬間…

ガシッ…！

誰かの手によって、男の腕の動きが止まった。

「はい、ストップ」

「ッ!？」

「なにっ…!」

振り下ろされる筈のナイフが、止まったのだ。

ヘッドの男よりも細身で、見た目からは想像もできない程の力があるようだった。

その青年は、笑っていた。

「楽しそうだね、君たち」

「耀!？」

「神林先生!！」

突如、現れた耀に3人は驚いた。

「まあ、聖が殆ど倒したから、お前しかいないんだけど、なっ!」
「グハッ…!」

そして、耀は男の顔面を殴り…、

ドスッ

宙に蹴り上げ、足を後ろへ引き…、

ゴッ

一瞬で足を男の腹目掛けて、振り上げた。
まるで、サッカーのボレーシュートのようだ。

そして、男は星になった。

アイツ、こんなに凄かったっけか…？

「……」

3人は絶句したまま、呆然と見ていた。

何事でも無いかのように、耀は振り返りざまに微笑みながら言った。

「皆、大丈夫か？　じゃ、そろそろ戻ろうぜ」

「先生、すごいですね！」

「いやあ、それほどでも？」

アツハツハツハ！と、高らかに笑う耀の声が、部屋に響く。

神林御一行は、海に近い旅館に移動していた。

皆、お風呂に入って、浴衣に着替えている。

それから、耀の自慢話に、那子が聞き入っている。

自慢話の内容は、昔サッカー部に所属していたときのことや、喧嘩やナンパのことなど、段々と下らないものになっている。

そんな中、加奈が聖の近くに寄って行った。

「神林先生、すごいね」

「……」

聖は、加奈の言葉を聞いているのか、聞いていないのか、分からなかった。

何故か、無言で布団を敷いているからだ。

「…何で、布団敷いてるのよ？」

「眠いから」

「子守唄でも歌ってあげましょうか？」

安らかに眠れるように。と加奈が言った所為か、聖は遠慮する。とだけ言った。

「お前が子守唄なんか歌ったら、俺は永眠するかもしれないだろ。」

「そんなことないわよ」

2人が火花を散らしている中、那子の言葉で聖は我に帰った。

「え、寝るの？ 聖君」

「ええ。永遠に眠っていたいそうよ」

「そんなに眠いの？」

「おい、齋条。嘘を吐くな」

聖は加奈を睨みながら、すすすつ、と那子に近づいていく。まるで何かから守るかのよう。実際、耀以外は何もないのだが…。

「じゃあ、そろそろ寝ますか。」

「そうですね。お休みなさい、先生」

「おやすみなさ〜い、先生。」

「はい、おやすみ」

耀の一声で那子と加奈は自分たちの部屋へと戻っていった。

ようやく静かになるな。 ……コイツがいるけど。

と、聖が思っていると、那子から声がかかったので、そちらを見る。

「おやすみ、聖君！」

「…あ、ああ、おやすみ」

そう言っつて、那子は隣の部屋へと去って行った。

聖は名残惜しそつに、那子がさっきまで居た場所を見ていた。

「一緒に寝られないのが残念？」

「煩い、黙れ」

そう言っつと、静かになった。

耀にしては珍しい。

「電気消すからな」

電気を消すと、聖は布団に潜り込んだ。

「聖くうくん。隣で寝ようよお」

「キモイ。…っーか隣だろ」

「同じ布団で」

「Good night」

「英語かよ！」

そんな耀の言葉には耳を貸さず、聖は寝返りを打つ。
諦めたのか、耀は聖の隣で寝息を立てている。
それにしても、寝るのが早い。

明日で那子に会えなくなると思うと、寂しいな…。

疲れたのか、いつの間にか、聖も寝息を立てていた。

“栄光”という名の自傳話（後書き）

耀は喧嘩強そうですね。

聖よりも。

タイトルは一部しか…（；、、（

この瞬間が、思い出になるのなら…

翌朝

朝風呂して、朝食食べて、荷物をまとめ、俺たちは旅館を出た。海で遊ぶにしても「海の家」という、とても便利な所があるから大丈夫だろう。

「お前ら、また泳ぐのか？」

「うん！」

「今度は俺も一緒だから、ナンパされる必要はないぞ」

「お前が一番心配だ」

3人は俺を砂浜に置いて、海へ飛び込んでいった。何で暑いのに元気なんだ…。

これで、那子と二人つきりだったら、どんなに良かったことか…。とりあえず、折角パラソルを借りてきたのだから、寝るとしよう。暑いけど…。

あれから、どの位の時間が経ったのだろう。
大分、寝ていたような気がする。

…って、あれ？

何か、柔らかいものが近くに…？

「…聖、お前、何やってんの？」

「あ…？」

耀の声がしたから、一気に気分が悪くなったじゃねえか。
後でジューズ奢れよな。

まあ、俺はとりあえず目を開けた。
視界に映ったのは、那子だった。

視界に映ったものを詳しく言うと、俺は何故か那子の手を握っていた。

「あ、起きた？」

「……ん」

俺、何やってんの？

つか、いつの間に那子が俺の隣に座ったんだ？

「どっしたの？」

…と、言ってきたのは齋条。

良かった、見られていない。

「もう昼だから、海の家で何か買ってきたらさ、聖が那子ちゃんに…グホッ！」

「無意識だったの」

俺は耀の頭を力いっぱい殴った。

これじゃあ、死亡フラグが立ってしまっじゃないか！

「無意識なのに、那子に手をかけよう…？」

知ってたのか！？

「お前、女じゃなかったら殴り飛ばしてたぞ」

「あら、怖い」

斎条にはイラつくことが多々あるが、コイツは一体何をしたいんだか…。

「つーか、もう帰るからパラソル返して来いよ」

「…は？ マジで？」

もう、そんな時間なのか？

日暮れまでは、まだ余裕がありそうだが…。

「俺、明日学校行かなきゃなんないからさ」

大人の事情ってやつかよ…。

「飯食ったら、車出すからな」

「あのレンタカーか」

「不満なら、一人で電車に乗って帰ってこいよ」

「何でそうなるんだよ、ハゲ」

「どこが!?! 俺のどこが!?! ねえ!」

俺は耀を無視して、コンビ二袋の中を弄る。

「俺 どれ食べていいの?」

「ジャンケンで決めようと思ったんだけど」

「…マジで?」

「いくぞー。じゃーんけーん」

ぽんつ。 というタイミングでグーを出した。

3人はというと…、全員パーだ。

「な、言つたる? コイツ最初は絶対グーを出すんだぜ」

「テメエ…」

「あら、いいじゃない。仕方ないでしょ」

「そーだ、そーだ」

大人気ねー。

…まあ、何でもいいや。

ここで殴ったって、どうしようもない。

どれ、中身は…。

「それ、私が適当にかごに入れたものばかりよ」

「マジで?」

「俺これー」

…何で、お前が最初に取ってるんだよ。

女2人に譲るといふ事が出来ないのか、貴様は。

「私 これね」

「永野君は？」

「どっちにしる、一つしかねーだろ」

何度も思うが、何がしたいんだ、コイツは…。

コンビにで買ったというものを、それぞれ胃に押し込み、パラソルを戻した。

那子が海を見ていたので、隣に移動する。

俺に気づいた那子は、暫く、何も言わずに見つめていた。

それから、しばらく、名残惜しそうに、海を眺めた。

「また来たいね、海」

「…そう、だな」

俺は一言だけ、答えた。

そつだな。 また、那子と来れたらいいな。

海だけじゃなくて、他のところにも…。

今からでも、待ち遠しいくらいだった。

この瞬間が、思い出になるのなら…（後書き）

このシリーズ書いてたの、去年の夏だよ！WWW
私何してたの！？　って感じです。

まあ、投稿は気長に待ってけると嬉しいです。
見てる人も、そんな居ないだろうけどね…。

実はこれ、先月あたりに終わらせようと思って書いてたブツなんです…、

計画が大幅に逸れたので、まあ、いつか。みたいなWWW

季節感ずれてますが、気にしないで読んでください。

ついでに、サブタイトルって、かなり適当に付けてたんだな。
って、実感WWW

編集して短くしています。

喧騒の波の中に…

あと数日で白桜祭が始まる
…。

「平和だな、ここは」

「静かだね」

…と、屋上で休息をとっているのは1組の“バカップル”。

まだ正式に付き合っていないとしても、傍から見れば恋人同士である。

那子と聖、2人が白桜祭数日前に何をしているかということ、束の間の休息を取っている最中だ。

因みに、白桜祭とは、彼らが通う？白桜高校？の文化祭の名称である。

「でも、もう少しで時間だから手伝いに行かないと…。」

「まだ大丈夫だって。那子は今までの作業を頑張ってたから、皆が時間をくれたんだ。」

そうだけど…。と言葉を続けようとする那子を聖が止めた。

抱きしめて…。

「ひ…じり、くん？」

「充電中です」

「そうですか」

聖がロボットののように言うので、那子もつられて片言になってしまった。

「白桜祭の準備で忙しくって、なかなか一緒にいられないだろ？」

「うん」

「だから、今はこれで我慢しておきます」

「うん。じゃあ、私も」

そう言っつて、ぎゅうーつと那子からも抱きしめ返した。

その行動に聖の理性が保たれたのも、奇跡と言うべきか…。

今にでも押し倒したいという気持ちを留めたのは、那子の友人 齋さい条じょう 加奈かなの存在もあったからだろう。

聖は命拾いしたとでも言っつておこつか。

そんなことをした暁には、齋条によって何をされることか…。

最近は役員や係りの仕事で、一緒に帰る日も少ない。

こういった時間は、聖にとって救いというか、癒しである。しかし、そんなひと時は、予鈴によって終わってしまった。

那子たちのクラスは、文化祭でも定番の喫茶店。

クラスの半分の女子と男子が交代でウェイター、半分は裏方で宣伝したり厨房で慌しく動いたりするという配分である。勿論というか、那子と斎条はウェイトレスで、聖が裏方。

聖は未だにクラスに溶け込めていない状況なので、そこまで真面目に仕事をしていない。

まあ、する気もないのだろうか…。

そして、それを咎める人も那子と加奈しかいないので、その状況はあまり変っていない。

「ほお？ 立派にサボリですか、永野^{ながの}くん」

「…テメエは何でここにいるんだよ、クソ教師」

「あのねえ、先生に向かってその口の利き方は、一体何なんだ!？」

那子と別れた後も、ずっと屋上にいた聖を見つけたのは、耀^{よう}だった。

「昼寝中なんで、静かにしててください」

「お前、白桜祭の準備は？」

「他の奴らがやってんだろ。俺がいても邪魔なだけだし」

「…邪魔？ 何で？」

「みんな、俺のこと嫌ってんだよ」

耀は不思議そうな顔で、聖をマジマジと見た。

何で聖のことを嫌っているのか、心底、不思議そうな顔で。

コイツ、噂とか知らないのか？

聖は訝しげに耀を見ながら、思った。

耀は何か閃いた^閃と言わんばかりに手を叩いた。

「お前、もしかして苛められてんの？」

「…違う」

「ヤメロツ！　？お前バカじゃねーの？？？って目で見るのはヤメロツ！」

耀は聖からの目線を遮るかのように、両手で顔の前にバリケードを作った。

聖は一つ、溜息を吐いた。

「確かめもしないのに、一人でそう思っても仕方ないだろーが」

耀は慰めるように言った。

「教室、行ってこいよ。何か変わるかもしんねーし」

聖は怪訝そうな顔で、耀を凝視した。

またもや、耀は両手でバリケードを作っていた。

「加奈ちゃんっ、見てみて！」

「できたんだ。ウエイトレスの服」

那子は加奈がよく見えるように、くるっとその場で回って見せた。

「那子、可愛いよ」

那子は照れくさそうに、えへへ。と笑った。

「加奈ちゃんは？」

「できてるよ」

「見せて、見せて！」

「当日のお楽しみね」

「え〜!？」

騒がしい教室の中、ふわふわとした会話をしているのはこの2人だけだった。

他の担当のところでは、指示の声や怒号が飛び交っている。

裏方は調理室の準備や、看板などの小道具づくりなど、切羽詰っているのだろう。

ウェイトレスやウェイターは、自分たちで制服を作らなければいけないので、大変だったりする。

空き教室でミシンをガタガタさせて、こっちはこっちで忙しい。

それぞれの仕事が一段落、あるいは終わったりしたら、他のところを手伝わなければならない。

まだ、準備は終わりそうに無い。

白桜祭まで、あと数日…。

やらなければいけないことは沢山ある。

そんな中、調理室にいる裏方たちに衝撃が走る。

喧騒の波の中に…（後書き）

お久しぶりです。

前回の投稿から、丁度4ヶ月がたちました。
私は元気であります。

君と僕がすれ違つまで…

ガラツ …と、戸が開いたのはわかった。

だが、そこに『不良』として怖がられていた人物が立っていることを、誰が想像していただろうか。

戸の前にいた人物 永野 聖…。

その場にいた全員が、一時停止…といった状態になった。

「な、永野も裏方だもんな！ どっか、まだ作業終わってないところあるー！？」

僕は永野の近くに歩み寄りながら、周りに声をかけた。

そうでなければ、皆は永野の存在を“無視”するだろう。

何故なら、誰も『不良』と呼ばれる人物に、近づこうとはしないからだ。

だけど！

僕はクラスの中心的存在でありながら、皆に頼られている。所謂、ムードメーカー且つしっかり者の称号を得た人間だ。

この場を和ませるには、僕 峰^{みね} 守^{まもる}の存在は必要不可欠なんだ。

しかし、僕の問いに、周りは答えなかった。

一人一人が、隣とヒソヒソと話す声しか、聞こえなかった。

「じゃあ、僕がいるトコ、あんまり進んでないんだよね！ 僕以外、働いてくれなくてさー！」

この言葉に、僕がいる看板作りのメンバーが気を悪くしたらしい。まあ、悪ノリみたいな感じだけど…。

「何をうー!? お前だつて、さつき『僕は貧乳派だ』とか言つてたくせによー!」

「そこは無難に巨乳だろっ」

「お前ら、どんな話してんだよー!」

さつきまでの緊迫した空気が和んできた。
良かった、良かった。

まあ、僕にしてみれば、簡単なことなだけどね!

ちなみに僕は貧乳が特別好きなわけではない。

…って、そうではなくて!!!

その場にいた皆は、自分の作業へ取り掛かった。

まだ永野聖のことを気にしているようだったが…。

「よし、とりあえずレタリングだな! まだ途中だし…」

「あれ、面倒なんだよな!」

「色塗るだけなら、簡単なんだけどな!」

君ら、数日っていうけど、あと2日だからね!

2日で完成させないといけないんだからね!

わかってんのか!?

「…で、どうすりゃいいんだ?」

おおっ!

今まで黙っていた不良王子が喋ったぞ!

っーか、何で皆凍結してんだよっ!
フリーズ

「まあ、イメージとしてはこれなんだよね」

完成図を描いた紙を永野に渡す。

看板のイメージとしては、縦で壁に立て掛ける様な感じ。

店の名前は『喫茶 ONOGUCHI』。

誰だ、店の名前考えたの。

担任の名前じゃねえか！

センスねえな！

ついでに言う。

一人ツツコミは空しい。

俺がそんなことを思っている内に、永野はその場にしゃがみこんだ。近くにあった鉛筆を拾い、看板に淡々と線を描いていく。

「お、永野うまいじゃん」

「どっかのエロ好きとは違うな」

「テメエ、それは俺のことかっ！」

案外うまい。

全部等間隔だし、文字の大きさも工夫とかあるけど、ほぼ同じ。

レタリング作業は、永野だけで5分もしなかった。

「早っ！ うまっ！ すごっ！」

「字、キラー！」

と、口々に永野を褒め称えていく。

さっきの緊迫した表情はどうしたんだ。

「あのさ」

「え、何…!?!?」

いきなり永野に話しかけられた僕は、かなり驚いた。

なぜかは、自分でもわからない。

何なんだ、僕。

「ここの色、変えた方が全体的にスッキリすると思うんだけど…」

「ああ、そこね。どんな色だったら良いかな？」

「ミントグリーンとか薄い色の方がいいんじゃないか？」

「そうだな」。 そしたら、ここの色も変えたら良くなると思うな」。

…って、案外フツー。

何この人、本当に不良？

でも、不良って結構優しいって聞くけど…。

な、なんなんだ！

コイツの正体は一体、なんなんだ!?

そして、放課後…

「いやあ、永野のお陰で、看板も完成したよ」

「別に…。俺は何もしてない」

「永野がいなかったら、確実に今日中に完成していなかった！」

皆、永野がいたからやる気が出たんだって！」

「峰が気が使って、頑張ってたからだろ。」

「そんなことないって〜！」

…なんて口では言ってるけど、やっぱりそうなのかな。
って、思ってしまう。

自惚れてしまうのは、悪い癖だ。

そんな自分がどうしても×××…。

「じゃ、俺こつちだから」

「あ、そうなんだ。それじゃあ、また明日な！」

「ああ…」

永野は俺に背を向け、飄々と去ってしまった。

僕と永野の出会いなんか、高が知れている。

ただ、同じクラスになったというだけだ。

だけど、同じクラスだと知る前から、僕は永野聖のことを知っていたんだ…。

君と僕がすれ違うまで…（後書き）

新キャラ登場です。

峰くんです。

耀よりはウザくないけど、ウザキャラ要員かも…。

聖がちよっと変わる、人物になり得る人物…？ W W W

憧れ

入学式の日、自分のクラスが1-Cだと知った。
他の名前も見ただけど、同じ中学にいた奴らの名前はなかった。
これからREスタートだな。と思っていた矢先のことで、そのときは混乱していた。

ドンッ

僕は運悪く、柄の悪い先輩にぶつかってしまった。
その先輩たちは、集団で行動していて、すごく怖い。

「あつ、すみません！」

すぐに謝ったけど、睨まれた。
速攻で、薄暗いところへ連れて行かれましたとさ…。

そのときのことを、僕はあまり覚えていない。

多分、怖くて震えていたか、あるいはその状況を楽しんでいたか……。下っ端らしい奴に、襟首を捕まれ、金を出せ。って、脅されたはずだ。

僕は声を出せなかった。

もしかしたら、態と、出さなかったのかもしれない。

それが逆に、奴らの反感を買ったんだ。

殴られそうになって、僕は目を瞑った。

身動きが出来なかったから、そうするしかしなかった。

ドゴッ

…と、鈍い音を聞いている間に、僕は尻餅を付いていた。何故だろう？

簡単なことだ、相手が僕の胸倉を掴む手を離れたからに決まってる。

僕は何が起こったのか、不思議に思いながら、目を開けた。

「…?」

「お前、なにやってんだ?」

目の前には、鋭い瞳で僕を見ていた、いや、睨んでいた少年がいた。同じく、新入生なのか、左胸には入学祝の花が付いてある。

その容姿は恵まれている、とても言おうか…。

正直、羨ましいスタイルだ。

両親や祖父母に文句があるわけでもないのだけれど、憧れるのだ。

「いつまで、そこに座ってるつもりだ?」

その声で、僕は我に帰り、そして、ようやく僕の脳みそは認識した。この人が上級生を殴り、魔の手から救ってくれた張本人なのだ……。

挨拶もそこそこに、僕らは、1Fの廊下を走っていた。

まだ、学校の内部を把握していないので、集合場所の研修室には辿り着いていない。

玄関で研修室の場所を教えてもらったはずだけど、さっきの騒動で忘れてしまった。

記憶が曖昧な僕は、校内案内図を見ながら走っている、彼の後ろについて走っている状態だ。

そんなとき、ピンポンパーンパーン……、というお約束のアナウンスの合図が鳴った。

『全校生徒に連絡です。体育館に集まってください。また、新入生は1Fの研修室に早く、集まってください』

「僕らが研修室に行っていないから、放送がかかったの!？」

「……そんなに騒ぐことか？」

彼は僕が先輩たちに連れ去られていくのを、偶然、目撃したそうだなんという偶然だろう。

それから、それを見ていた人たちは、誰も僕を助けようとはしなかったそうだ。

関わりたくなかったんだろう。

だけど、彼は助けてくれた。

それに、数分もしないうちに、先輩たちをめぐったためたのぎったぎたに、更にプライドもズツタズタにしたのだ。その時の彼は、とても格好よかった。

僕は、一目で彼に魅入ってしまったのだ…。

ただ、僕の所為で彼も遅刻扱いになるだろう。

「騒ぐも何も、僕らの所為で式の開始が遅くなるんだよっ!？」

「…誰の所為で、こうなったんだ？」

僕の所為です…!

彼が頑張ったお陰で、なんとか研修室に辿り着いた。

先生にはあまり怒られずに、注意だけで済んだ。

それからは、新入生の入学式が行われたが、挨拶やら何やらで退屈だった。

入学式が終わった後は、各クラスでオリエンテーションや自己紹介などが行われた。

僕はま行だから最後の方だ。

一番は女の子だった。

「嵐」という苗字とは、対照的な子で、大人しくて、ちょっとおどおどした感じの子。

次々に自己紹介を終えていき、次は彼の番だった。

「西中出身、永野聖。よろしく」

一言って、短すぎじゃないですかー!?

心の中でツツコム。
空しい。

…そうか、彼の名前は『聖』、か。

さっき会ったばかりだったけど、名前は聞いていなかった。
友達、いや、親友になれたらいいな。

「永野はいるか？」

全員の自己紹介が終わったとき、生活指導の先生 名前は忘れたけど
どが、教室に入ってきた。
何で、永野君が…?

「はい」

永野君は立ち上がった。

「職員室に来なさい」

先生が威厳のある声で言った。

永野君は黙って、先生の後に付いて行った。

戸が閉まった後、教室中がざわざわと騒ぐ。一体、何があったんだ…？

「おい、静かにしろーっ」

先生が注意をした。

だけど、その時の僕には心当たりがあった。僕を助けたとき、永野君は上級生を殴っていた。きっと、それが原因だ。

翌日、彼は学校に来なかった。

憧れ（後書き）

峰君、好きだよ。

純粹に、聖と友達になりたいだけなんだよね、コイツ。

峰君も結構、不器用なんですよ。

でも、学校祭とか文化祭のシーズンって、もう終わってる？（；・
）

僕は逃げている

翌日、彼は学校に来なかった。

この事件に関わった人間しか、永野君のことを聞かされていなかった。

学校はこのことを大事にはしなくなかったらしい。

他の生徒には誤魔化してきていた。

しかし、一部の情報通の生徒には伝わってしまったが、他言しない人が多かった。

永野君の処分は？停学？。

無期限かもしれない、と聞かされた。

その後、僕は自分を責めた。

僕があそこで上級生にぶつからなければ、永野君は停学にならずに済んだ。

永野君が停学になっても、直ぐ先生に弁解すればよかったんだ。

僕のせいで停学になったんだから、停学中、永野君に謝りに行けばよかったんだ。

家を知らなくても、担任から教えてもらえば、直ぐにでも行けたはずだ。

それに、僕が謝りに行った所で、何になる？

もし、？お前の所為だ？なんて言われたら？
？もう話しかけるな？って言われたら？

だけど、カツアゲされてた僕を助けたから、助けなければこんなことには…。

永野君だって、先生に言い訳すれば停学には…。
僕の所為だって言えばよかったんだ…。

でも、僕は弱かったから、臆病だったから、勇気がなかったから、
結局、何もできなかった…。

永野君と話すまで、この考えが僕の頭の中でループしていた。
このことを考える度に、胸が締め付けられるように痛かった。

？罪悪感？というものが、僕の胸に突き刺さったんだ。

それが、今でも突き刺さっていて、痛みが取れない。
永野君が、まだ恨んでいるのではないか、と…。

幸いなのか、停学期間は一週間だけで済んだ。
このことを知っている生徒は、上級生を数人病院送りにしたから、
相当長いと予想している人が多かった。

そして、僕は決意していた。
学校へ来たなら、誠実に謝ろう、と…。

だけど、彼は教室へは来なかった。

僕は不安に駆られた。

焦って、焦って、焦って…。

汗がどっと吹き出るようだった。

何かあったのか、どうしたのだろうか、僕のことを嫌いだから来ないのではないか…？

色々な考えが頭を巡る、廻る、回る。

HRが終わると、周りの級友たちが集まってくる。

僕は即座に、笑顔を作った。

「なあ、峰、聞いたか？」

「何を？」

「永野のことだよ」

ドクッ、ン……

？永野？と聞いただけで、鼓動が早鐘を打つようになった。

「なんか、休んでた間、他校の奴等と喧嘩してたってよ？」

「あゝ、10人相手だったけど、全滅だろ？」

皆、永野君が停学だということを知らないから、？休んでいる？という事になっている。

だけど、永野君は学校には来ているらしい。

教室には来ていないだけで…。

少し、安心してしまった。

「無傷だったさ、何か怖くね？」

「そりゃ、な？」

「峰も気いつけるよー」

……どうしよう。

どうしようどうしようどうしよう…
僕の、僕の所為だ僕の所為だ…

「…峰？」

ハッと、僕は我に帰った。

「なした？ 元気ねえな」

「顔色悪くないか？」

「保健室行って来い。 保健室っ」

皆が心配して声をかけてくれる。

永野君とのことを言ったら、皆どうするだろうか。
どんな反応をするだろうか。
驚くか、呆れるか、蔑むか…

「いや、大丈夫」

僕は癖で、笑顔を作った。

僕は恵まれている。

比較的、周りよりは恵まれている。

だけど、愛には乏しかった。

比較的、周りより、愛に乏しかった。

僕は、恵まれていた。

けど、

愛に飢えていた
：

昔から、両親は多忙で、親戚や祖父母など親類に預けられることが多かった。

周りには迷惑をかけないように振舞っていたし、我侭も言わなかった。

ずっと？いい子？を演じ続けていたのだ。

周りでは？聞き分けのいい子供？であった。
そうでなければいけなかった。

だけど、両親が久しぶりの休息だった日、
僕は？ある失態？を犯してしまった。

その所為で？いい子？だった僕は両親に、
怒鳴られ、罵られ、暴行を振るわれてしまった。

僕にしたことは、とても些細なことだった。
しかし、なかなかとれない休息の日に、僕は粗相をしてしまった。
日ごろ仕事をして、疲れている身に、追い討ちをかけてしまったの
だ。

その日から、過剰な被害妄想をするようになった…。

僕は逃げている（後書き）

やっと更新

全然、文化祭関係ありません。

いつ終わるんだっ！

峰くんは、基本ネガティブです。

トラウマとトモダチ

「はあ？ お前、そんなこと考えてたのか？」

僕はその言葉を聴いた瞬間、笑ってしまった。

そんな僕を見て、永野君は？ 変なもの？ でも見るかのように顔をしかめた。

僕 峰 守は、友人 永野 聖と、話をしていた。

長かった文化祭の準備が、やっとのことで終わった。

打ち上げは？ 文化祭が終わったあと、教室で騒ぐ？ ことで落ち着いた。

今は明日のミーティングや最終調整、各自打ち上げなど……。

しかし、僕と永野君は学校に一番近い、駅前の喫茶店に来ていた。

理由は、僕が永野君に話をしたかったからだ。

永野君が停学になってからのことを、全て。

それでも、過去のことを話すのは、怖くてできなかった。

無理に話す必要もないし……。

永野君に、今更こんな話をするなんて…。と、自分でも思う。ただ、これは僕の、せめてもの罪滅ぼしだ。自己満足に終わっても、構わないと思ったから…。

そうしたら、永野君は、

お前、そんなこと考えてたのか？

なんて言うものだから、自分でも馬鹿馬鹿しくなった。馬鹿馬鹿しくなって、笑った。笑った、自分を。

そんな僕を見て、更に、

「変な奴」

と言うから、笑った。自分を、嘲り笑った。

「…落ち着いたか？」

と、聞くと、峰は僅かに、頭を縦に動かした。

峰の笑いが、やっと収まった。

何がこいつの引き金となったのか、わからなかった。

だから、ただ、ただ、コイツを見ていることしかできなかったのだ。驚いたのは、そこまで？峰 守？という人間が、俺のことで塞ぎこんでいた。ということだった。

塞ぐ というのは、引きこもりとか、見た目のことではない。峰の性格はそれとは真逆で、明るくて、クラスの中心人物だった。しかし、内面的な意味 他人には見えない部分で、塞ぎこみ恐れられているということだった。

これを人は？トラウマ？と言ったりするのではないだろうか。

「はあ…。」

笑い疲れたのか、峰は深い溜息をついた。顔はまだ、にやけている。

「いや、ごめん。勝手に一人で笑って。」

「他の奴なら、大概、引いてるな」

「もう、ドン引きだよな」

…この、峰の？笑顔？は、どこまで本当なのだろうか。

今の話を聞く限り、峰は自分を偽って生きているんじゃないだろうか。

自分を殺して、クラスでは明るく振る舞っているだけなんじゃないだろうか。

…考えすぎか。

「僕、永野君に話ができ、よかった。」

「……」

「このままだったら、本当に自分が壊れちゃいそうだな……」

「お前、学校は楽しいのか？」

峰には予想外の質問だったらしい。
目を丸くして、少し驚いたようだ。

「学校は、楽しい。 皆は、色んな自分を受け入れてくれた。」
「……？学校は??」

峰は、少し目を伏せて、やがて微笑んだ。

「家は、楽しくないんだ。 息苦しくて」

「何か、あったのか？」

「別に、大したことじゃないんだけど」

大したことじゃないなら、こんな風にはならなかったんじゃないのか？

そう聞いたら、？それでも、些細なことだから？と、言葉を濁した。
俺は、峰がそのまま壊れそうで、怖い。

実質、30分くらいしか、喫茶店にはいなかった。

「話ができて、よかったよ。」

「お前に何か、荷を負わせていたようで、悪いな。」

「いや、俺があんな性格だから…、永野君が気負うことないよ。」

そうやって、無理矢理、笑顔を作ろうとしているのが、見ていて痛々しかった。

「それじゃ、俺、寄る所あるからっ！」

「待てよ。」

気づいたら、峰の腕を掴んでいた。

「何かあったら、相談しろよ。」

驚いたように、目を見開いていたが、やがて、目元を緩ませて笑った。

「おう、ありがとな。 聖」

俺は峰の後ろ姿を、人ごみに紛れるまで見送った。

見えなくなると、安堵の為か、溜息が出る。

これで、彼の肩の荷も、少しは軽くなっただろうか…。

トラウマ と トモダチ（後書き）

打ち明けたっけ、「しょーもねーこと考えてたのか、お前」。
なんて言われたら、自分でも何考えてたんだろう？とかつて、
後悔することがある。

永野君 聖 に昇格です。

小さなエピソード

白桜祭当日はくおうまつり

文化祭は、9時の生徒会の放送で始まる。
今は8時25分を過ぎたところだ。

「よしっ！ 皆、いるな!？」

1-Cでは、峰を中心にクラスメイト達が集っている。
しかし、? 戦闘開始? と言わんばかりに、峰だけが活気付いている。

「もう一度言っ!」

開口一番、峰が毎回口にしていたことを、反芻するかのようにつ
た。

「文化祭の争いは、放送が流れる前から始まっている!
開店は9時だけど、30分前から宣伝をして、客引きだ!」

と、言うが、周りは生返事を返しただけだった。
それから、峰がクラス全体を活気付けるために、音頭をとった。

「これから3日間、頑張るぞー!」

那子と加奈は、ウェイトレスの服を着て、宣伝用の看板を持ち、廊下を歩いていった。
窓を見ると、既に校舎に入ってくる人達の姿も見える。

「って言われてもね。私、ああいうの苦手なのよ。」

「峰君も頑張ってるんだから、そういうこと言わないのー。」

「でも、面倒だなーって思わない？」

「私は、行事とか張り切っちゃう方だからなあ。」

「那子は偉いもんね〜。」

決して嫌味ではないその言葉を、那子も理解したのか、微笑んだ。

「それより、加奈ちゃんの服、ちよつと過激だね…。」

加奈は裾が短く、凹凸が少しはつきりしたワンピース姿の自分を見下ろした。

「ああ、これね。あの、神林がやったのよ…。」

「先生が？」

加奈はその時のことを思い出したのか、体をわなわなと震わせた。

それは、加奈が放課後、一人で服を作っていたときだった。そんな時、ひよっこりと現れたのが、耀だ。

「あれ？ 加奈ちゃん何してるのー？」

「話しかけないでください、邪魔です。」

「あ、ウエイトレスの服づくりか！ そういえば、喫茶店やるって言ってたなあ」

「……」

先生を無視するな！。とは言うが、そもそも本人はそんなこと気にしていない。

「どれどれ、その糸の解れを、この俺が直してあげよう！」

「結構です。」

と、加奈は言ったのだが、いつの間にか耀の手には、加奈が持っていた服があった。

「ちよっ…と！」

「だいじょぶ、だいじょぶ」

「か、返してっ！」

立ち上がって手を伸ばすも、空を掴んだだけだった。

そして、さっきまで加奈が座っていたイスに、いつの間にか耀が座っていた。

更に、ミシン台に服を広げ、縫い始めるではないか。

加奈はそんな耀を、戸惑いながら見ていた。

それから数分後…。

「できたー!!」

「って、ちよつと、何よソレ!」

耀の手によって改造された加奈のコスチュームは、ワンピースの裾が妙に短くなっていた。

心なしか、バスト辺りとウエストがきつくなっただのではないかと、心配だ。

「僕は加奈ちゃんのスリーサイズを把握してるから、きつとびつたり…、ぐはあっ!!」

教師として問題発言を口走った時には、耀は左頬を殴られていた。

「何であんたが私のスリーサイズ知ってて、服を勝手に作り変えるのよ!」

「俺は、女の子を一目見ただけで、スリーサイズが分かっちゃ目を持つているのだよ。」

左頬を押さえながら、耀は真顔で瞳を輝かせた。

「…も、もう、帰って!」

加奈はそんな耀に耐え切れず、顔を背けた。

耀は加奈が本気で怒ったと思い、焦って弁解しようとしたのだが、

「あ、ごめっ…。その、」

「いいから、帰って!!」

その思いも空しく、耀は教室を後にした。
耀がいなくなつたと分かつた加奈は、その場に座り込んだ。
赤面した顔を、服に埋めて…。

その時のことを思い出すと、顔が赤くなり、発作のように鼓動が速くなる。

このことは誰にも、きつと那子にも言えないことだ。

教師とのちよつとした事件だと、他の人は思うだろうが、加奈にとつては一大事である。

異性と話すだけで、顔が熱くなり、鼓動が速くなることなんて、今までなかったのだから…。

でも、加奈はこの気持ちは何なのか、自覚するのはまだまだ先のことだろう。

「お、ウェイトレスはっけーん！」

前方から、誰かに声をかけられて、加奈は我に返つた。

その声の主は、神林 耀だ。

「那子ちゃんは、いつもより可愛いなあ〜。」

いつものように、耀は軽い調子で話しかけるが、加奈は耀を避ける

ように、後ろに下がる。

そんな加奈に気づいたのか、耀は加奈を見て、言った。

「やっぱりな。」

「…何がですか。」

加奈は耀を睨んだ。

それでも耀は、加奈に近づきながら笑顔で言った。

「僕の仕立てた服の方が、加奈に似合うと思ったんだ。」

耀は手を振って去っていった。

加奈の頬にキスを残して…。

「…っの、阿呆教師!!」

加奈は耀の去っていった方向に向かって、叫んでいた。

「お褒めに預かり光栄ですよ…っ」と

小さなエピソード（後書き）

加奈と耀の話ですね。

ちよっと長いですが…（；、（

文化祭編は結構、長くなるかも（；、（
嫌だなあ…（、（アハハ…。

白桜祭

一方、最終調整に取り掛かっている厨房では…。

「うーしっ！ 皆、頑張るぞー！」

と、言いながら、峰は周りの級友と騒いでいた。

「お前ら、いい加減手伝えよ。 厨房とか」

「聖、そんな固いこと言うな。 これも青春の1ページだっ！」

「張り切るトコ、違うだろーが」

級友と張り切っているが、周りとは思いつきり温度差が違う。目の前の作業には、目もくれていなかった。

聖は溜息を吐きながら、さっきまでは、あんなに活気があったのに。な。と思っていた。

「ま、心配しなくても、9時になったら本気出すよ」

「…最終調整ぐらい、手伝えよ」

「ああ、厨房めっちゃテンパってるよな。 アツハハハ」

「笑ってる場合じゃないだろ」

「じゃ、実行委員長は手助けしに行ってくるよ。 仕方なしにね」

「それがお前の仕事だっつーの」

手をひらひら振って、峰は厨房に消え去った。

峰のこういう姿を見る限り、悩みを抱えているなんて、思えないよな…。

『いよいよ、白桜祭はくおうまついが始まります。3日間、生徒の皆さんは頑張ってください。』

生徒会が白桜祭、開始の短いアナウンスの後、様々なBGMがメドレーのように流れた。

選曲は誰の趣味か、あるいは生徒会各々の好みか、それらの曲が校内では浮いていた。

「いらっしゃいませー！」

BGMがけたたましく流れる中、？喫茶 ONOGUCHI？も開店した。

「3名様、ごあんな〜い！」

「至急！ ティーセット追加！」

「早く、これ持っていけ！」

「お待たせしました〜！」

1-Cは既に、喧騒の波にのまれた。

厨房にいる人やウェイトレスなどは、慌しく動いている。

聖と峰は最初のタイムスケジュールは非番だったが、売れ行きが気になり、レジ近くで確認している。
那子も加奈も宣伝に出向いていた。

「…すごいな、人が。」

「そりゃーなあ。白桜祭は毎年、色んな所から、色んな人が来るんだぜ。知らないのか？」

「今年、こつちに来たばかりだからな。」

「地方人？」

「いや、実家はここら辺だけど、従兄の家の方が近かったんだ。」
「そっか。」

そう相槌を打った峰は、何か思い立ったのか、急に聖の腕を掴んできた。

「何っ…！」

「折角だし、白桜祭、満喫しないと損だろ!？」

そして、いきなり走り出した。

「峰っ、ストップ! 止まれ!」

「お客さん、? みね臨時特急? は、止まることを知りません!」
「知るかっ…!!」

廊下は走るなっ! という声を聞き流しつつ、2人は走る。

「ここ、ここ！」

「どこ、だって…？」

聖は息も絶え絶えに、吸ったり吐いたりを繰り返している。峰はそんなことお構いなしに、聖をぐいぐい引っ張る。

「やっぱ、料理部のカフェテラスっしょ〜！」

「テラスっつーか、中庭…」

「何も言うな！ よし、行こう！」

料理部は様々なところに模擬店などを出している。

メニューは場所によって違うらしく、中庭はチョコロス、ベルギーワッフル、クレープなどが各300円で販売してある。

それ相応の値段かは、食べてみないとわからない。

しかし、そんなところでも廻り合わせはあるもので…。

「あ、聖君だ〜」

「那子…」

「何だ、あんた達も来てたの」

これは、もう、運命ではないだろうか…！

「爆発しろー」

「何だって…？」

「いや、なんでもない。」

峰が何かを口走ったが、聖は気にしないことにした。次、もう一度言ったら、どうなるかは分からないが…。

「俺チユロスー。あ、あのクレープも捨てがたい…。ワッフルもいいなあ。」

「迷うぐらいなら、全部買えよ。」

甘いものには興味がない聖は、急かすように峰に言った。そんな峰を見て、加奈が一つ提案した。

「皆、それぞれ買って、回し食いすればいいじゃないの。」

「君達つ、間接ちゅーは気にしないのかい…!?!?」

「子供じゃあるまいし。」

「何それ？ お菓子？」

加奈はその点については無関心だが、那子にはそれ以前の問題だった。

見かねた聖は、峰に忠告するように、短い言葉で言う。

「峰」

「何？」

「お前、わかってるよな…?」

「間接ちゅーのこと？ 那子ちゃん食べた後、聖がそれを食べれば問題ないのでは…?」

あ、これは、もしかして、死亡フラグなの？」

何かを察した峰は、一気に顔を青ざめた。

「わたし、クレープ買って来るね。」

「よし、俺はチユロスー！ 加奈ちゃんはワッフルよろしく！」

「わかったわ」

「聖は場所確保！」

「……」

寂しいとは、ひとカケラも思っていない。

しかし、席を取るうとして、満席のテーブルに近づくのだが、自分を見て人が逃げていくのは少し空しい、と感じていた聖だった。

そして、数分後、3人は戻ってきた。

「美味しい〜」

「だろ？ 料理部の作ったものは何でも美味しいんだぜ！？」

「あら、永野君は食べないの？」

「いや、俺、甘いものは……」

苦手だから。と聖が言おうとした時だった。

「私が食べさせてあげるよ！ はい、あーん」

峰がその光景を見てニヤニヤ笑い、加奈が恐ろしい感じに髪を逆立てたりする中、聖はいつになく、赤面していた。もう、それは指先まで。

皆が食べ終わった後、急に峰が騒ぎ出した。

「って、君達！ そんなことをしている場合じゃなかった！」

「な、なな何だよ、急に……！」

さっきまでの焦りを隠そうとして、隠し切れていない聖が聞くと、峰が焦りながら答えた。

「次！ 俺らの番！ 回ってきたの！ もう、行かねば！」

「そういえば、皆同じ時間だったわね。」

「え、もう？」

「よし、皆捕まれえ！ ?みね特急?は止まりませんぞっ!!」

峰、一人で暴走するなっ!という声を聞き流しつつ、3人は峰の後を追った。

「白桜祭は、まだまだこれからだぞーっ！」

そんな峰の言葉を聞きながら…。

白桜祭（後書き）

「文化祭」から「白桜祭」に変更しました。
学校名は白桜高校です。

今更ですが（；、、）

他の文章も直しておきますので、

誤字・脱字があれば、報告お願いします。

峰って、こんなキャラだったっけ？

閑話 「目的」

3日間の白桜祭はくおうまつりも、今日で終わりだ。
後夜祭まで、頑張らねばならない。
何故なら…。

「そう！ 1位の賞品、食堂タダ券一か月分を獲得する為！」
「峰、煩めんどい。」

僕の宣言を真つ二つにしゃがったのは、聖ひつだ。
ついでに言うなら、今は勤務中。

最終日だからか、皆仕事にも慣れてスムーズだし、ちょっとぐらい休憩しても大丈夫だ。

「だって僕、いつも食堂だからさ、お財布に優しいんだもん。」

「俺は弁当だから、別にタダ券がなくてもいい。」

「そういえば、聖は愛妻弁当だっけ？」

「まだ妻はいねえーよ。」

「？まだ？って…。」

でも、候補はいるってことだよな！？
できるってことだよな！？

「それに、弁当は自分で作るし…。」

「はあ！？ 不良が自分で弁当作ってるの！？」
「…不良じゃない。」

そんな小さな否定は聞き流す！

高校男児が、自分で弁当作りますか、皆さん！？
作れたとしても、日の丸弁当だよ！？

このご時世、コンビニが購買でパンとか買っんじやないの！？

「栄養はしつかり取れよ。パンじゃ、少ねーだろ。」

「不良がオカン発言してるー！」

「不良じゃねえって、言ってるんだろ…！」

「ガッ！」

不良から、腹に鉄拳を喰らったぜ！

痛いから加減しろ、って言ったのに…！

「それより、今んとこ、順位どうなってるんだよ？」

聖の言う順位とは、各クラスの売り上げ額の順位のことだ。

掲示板に、3時間ごとに更新される。

クラスは全部で24。

その内の1クラスだけが、賞品を手に入れることができるのだ！

因みに、最高金額は40万越えだったかな。
ちな

例年の平均金額は、それでも25万円が限度だ。

この地域の文化祭は、ここだけだから客もある程度は入る。

「あ〜。トップは3・Aがキープしてる。今30万越えたって。」

「…で、ウチは？」

「……一応、10位には入ってる。」

「良いところ、いってんじゃねえの?」

「いや、ダメだ! 1位には程遠い!」

「差は?」

「…20万」

「差、開きすぎじゃね? ウチつて、結構少なかったんだな。」

「3-Aがおかしいんだろ! 平均額越えてんだろ!」

僕はひとり、悩みに悩んでいる。

髪を掻き乱し、売上帳だったかに、いろいろと書き込む。

それから、聖に気の利いた一言をかける。

「もう、お前、今日はフリーだろ? どっか行ってこいよ。」

「峰は?」

「…僕は、戦略練るよ。だからさ…、」

僕は一度、聖の方を見た。

そして、持っていたペンの先を、仕事をしている那子ちゃんに向ける。

「那子ちゃんと、思い出でも作っておけば?」

「……………」

無言かと思ったら、一言、聖は? サンキュ?と言って、那子ちゃんの方へと駆け出した。

「バカップルめ…」

あれで、まだ付き合っていないときた。

もう、周りは公認しているというのに…。

閑話 「目的」(後書き)

閑話です。

那子と聖のイチャイチャに移りたかつたんだ。

峰と聖しか出てこないから…w

文化祭っていうより、これ大学祭みたいな感じ？(違うか)

この文化祭は、作者の想像により作られています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6236/>

純粋少女と不良少年

2011年11月21日21時31分発行